

秋田県文化財調査報告書第240集

一般国道7号琴丘能代道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書V

—— 館の上館遺跡 ——

1994・3

秋田県教育委員会

秋田県埋蔵文化財センター

一般国道7号琴丘能代道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書V

—— 館の上館遺跡 ——

1994・3

秋田県教育委員会



館の上館遺跡全景(北東から)



幕郭上面の溝跡(北から)



出土青磁碗



出土青磁酒海壺

## 序

一般国道7号琴丘能代道路は秋田県沿岸北部を貫く幹線道路として計画され、秋田県教育委員会はその事業計画にそって昭和61年度から路線上の埋蔵文化財の事前発掘調査を実施して参りました。調査は能代市側より開始され、既に平成2年度までに縄文時代、平安時代の遺跡など6遺跡の発掘調査が終了し、その成果は昭和62年度、平成元年度、同4年度に4冊の報告書として刊行しております。

平成4年度は八竜町鶴川地区の館の上館遺跡が調査対象となりました。この遺跡は、本県中世の朝倉安東氏の内紛を記録した『湊・檜山両家合戦覚書』に登場する「カトウド城」と曰されている中世城館であり、既に昭和58年に刊行した『秋田県の中世城館』にも収載されている遺跡です。調査の結果、城館は、大小四つの郭によって構成されていることが確認され、このうち今回の調査にかかった東側の郭の周辺は6期にわたる溝で囲まれていることが判明致しました。

本書はこの館の上館遺跡の発掘調査成果をまとめたものであります、本書が今後の学術研究ならびに埋蔵文化財保護に役立つよう願ってやみません。

最後に本書を刊行するにあたり、調査から報告書作成に至るまでご便宜いただいた建設省東北地方建設局能代工事事務所はじめ関係諸機関、各位に深く感謝の意を表する次第です。

平成6年3月

秋田県教育委員会  
教育長 橋本 顯信

## 例　　言

1. 本報告書は一般国道7号琴工能代道路建設事業に係る館の上館遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本報告書は秋田県文化財調査報告書第167集『一般国道7号八竜能代道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ－寒川Ⅰ遺跡・寒川Ⅱ遺跡－』、および秋田県文化財調査報告書第178集『一般国道7号八竜能代道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ－福田遺跡・石丁遺跡・蟹子沢遺跡・十二林遺跡－』、秋田県文化財調査報告書第230集『一般国道7号琴丘能代道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ－鶴子台遺跡・八幡台遺跡－』、秋田県文化財調査報告書第231集『一般国道7号琴丘能代道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ－萱刈沢Ⅰ遺跡・萱刈沢Ⅱ遺跡－』に続くものである。
3. 本報告書の執筆分担は以下のとおりである。  
庄内昭男 … 第4章第2節、第4章第3節－（2）（3）、第4章第4節  
小林 克 … 上記以外の各章各節
4. 本報告書作成にあたり以下の方々からご助言、ご指導を頂いた。記して謝意を表する。  
浅野晴樹、井上喜久夫、小林喜兵、高橋与衛門、武田孝義、永瀬福男、若松鉄四郎
5. 土壌誌記中の色調は、農林省農林水産技術会議事務局監修、財團法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帳』によった。

# 目 次

## 序

### 例 言

### 目 次

### 挿図目次

### 表 目 次

### 図版目次

#### 第1章 はじめに

第1節 調査に至るまでの経緯 ……………… 1

第2節 調査の組織と構成 ……………… 1

#### 第2章 遺跡の立地と環境

第1節 遺跡の位置と周辺地形 ……………… 2

第2節 周辺の遺跡 ……………… 2

#### 第3章 発掘調査の概要

第1節 遺跡の概観 ……………… 5

第2節 調査の方法 ……………… 9

第3節 調査の経過 ……………… 9

#### 第4章 調査の記録

第1節 綱文時代後続期の遺物

(1) 土器 ……………… 11

(2) 石器 ……………… 27

#### 第2節 古代の遺物

(1) 土器 ……………… 35

第3節 中世の遺構と遺物

(1) 檜山遺構 ……………… 37

(2) 土器・陶磁器 ……………… 43

(3) 銭貨 ……………… 45

#### 第4節 近世の遺物

(1) 陶磁器 ……………… 45

(2) 銭貨 ……………… 46

#### 第5章 まとめ

第1節 綱文時代後続期の土器群に

ついて ……………… 51

第2節 中世の遺構について …… 52

## 挿図目次

第1図	館の上部遺跡の位置と周辺道路
第2図	調査区全体図
第3図	グリッド配置図
第4図	館の上部遺跡跡面配置図
第5図	遺跡の層位
第6図	縄文時代後続期の土器 (1)
第7図	縄文時代後続期の土器 (2)
第8図	縄文時代後続期の土器 (3)
第9図	縄文時代後続期の土器 (4)
第10図	縄文時代後続期の土器 (5)
第11図	縄文時代後続期の土器 (6)
第12図	縄文時代後続期の土器 (7)
第13図	縄文時代後続期の土器 (8)
第14図	縄文時代後続期の土器 (9)
第15図	縄文時代後続期の土器 (10)
第16図	縄文時代後続期の土器 (11)
第17図	縄文時代後続期の土器 (12)
第18図	縄文時代後続期の土器 (13)
第19図	縄文時代後続期の土器 (14)
第20図	出土石器 (1)
第21図	出土石器 (2)
第22図	出土石器 (3)
第23図	出土石器 (4)
第24図	出土石器 (5)
第25図	出土石器 (6)
第26図	古代の土器
第27図	帯郭上面全体図
第28図	帯郭上面溝跡上端断面図
第29図	SK01七坑平山図
第30図	SK01土坑断面図
第31図	中世の陶器 (1)
第32図	中世の陶器 (2)
第33図	中世の陶器 (3)
第34図	中近世の陶器
第35図	近世の磁器・小近世の残物

## 表目次

第1表	縄文時代後続期の土器観察表 (1)
第2表	縄文時代後続期の土器観察表 (2)
第3表	縄文時代後続期の土器観察表 (3)
第4表	縄文時代後続期の土器観察表 (4)
第5表	縄文時代後続期の土器観察表 (5)
第6表	縄文時代後続期の土器観察表 (6)
第7表	縄文時代後続期の土器観察表 (7)
第8表	縄文時代後続期の土器観察表 (8)
第9表	縄文時代後続期の土器観察表 (9)

第10表	縄文時代後続期の土器観察表 (10)
第11表	縄文時代後続期の土器観察表 (11)
第12表	縄文時代後続期の土器観察表 (12)
第13表	縄文時代後続期の土器観察表 (13)
第14表	縄文時代後続期の土器観察表 (14)
第15表	出土石器観察表 (1)
第16表	出土石器観察表 (2)

## 図版目次

図版 1	1 調査前遺跡全景 (東→西) 2 調査後遺跡全景 (東→西) 3 東側斜面での調査状況
図版 2	1 西側斜面での調査状況 2 東側斜面下完掘状態 (西→東) 3 西側斜面下完掘状態 (東→西)
図版 3	1 帯郭上面溝跡SD10, SD11 土壠断面 (西→東) 2 帯郭上面溝跡SD10~SD15 重複状態 (西→東)

3	帶郭上面溝跡SD10~SD15 完掘状態 (西→東)
図版 4	帶郭上面溝跡SD10~SD15 完掘状態 (北→南)
図版 5	1 東側斜面上層堆積状態 2 帯郭西側斜面SK01完掘状態 (東→西) 3 帯郭西側斜面SK01完掘状態 (南→北)
図版 6	古代の土器
図版 7	中世の陶器
図版 8	中世の陶器
図版 9	中近世の陶磁器・近世の磁器

## 第1章 はじめに

### 第1節 調査に至るまでの経緯

一般国道7号琴丘能代道路は秋田県沿岸北部琴丘町鹿渡地内を起点とし、能代市内とを結ぶ延長17.1kmの自動車専用道路として計画され、昭和58年度の事業開始から、平成4年3月には能代市側からの4.2kmが一部共用開始されるに至っている。

予定路線内には、いくつかの埋蔵文化財包蔵地がかかることが当初から予想されていた。そのため、秋田県教育委員会と事業主体者である建設省東北地方建設局能代工事事務所は協議をおこない、路線上の分布調査を実施し、現状保存の不可能な遺跡については、範囲確認調査を実施した上で発掘調査をおこない、記録保存をはかることとした。かかる協議を受けて昭和61年度には能代市側の寒川Ⅰ遺跡、寒川Ⅱ遺跡の発掘調査がおこなわれ、翌々年の昭和63年度には十二林遺跡、福田遺跡、石丁遺跡、蟹子沢遺跡が発掘調査された。八竜町側の調査は平成元年度から始まり、黄刈沢Ⅱ遺跡が調査され、翌平成2年度にはインター・チェンジ部分の鶴子台遺跡、八幡台遺跡、さらに平成3年度には黄刈沢Ⅰ遺跡が発掘調査されている。

館の上館遺跡は中世城館として周知の遺跡であり、その範囲確認調査は平成3年11月に実施された。調査の結果、路線は館の上館遺跡の東側の郭面(第Ⅰ郭)本体にはかからないものの、その周囲を巡る帶郭部分の一部が破壊されるであろうこと、また、この帶郭部分の斜面下からも中世陶器片の他、繩文を施した上器片、それに伴うとみられる石器などが出上し、調査の必要があることを確認した。この調査結果は建設省能代工事事務所にも伝えられ、平成4年6月本調査が着手された。

### 第2節 調査の組織と構成

1. 遺跡所在地 秋田県山本郡八竜町鶴川字館の上32-2
2. 調査期間 平成4年6月1日～9月7日
3. 調査面積 3,035m<sup>2</sup>
4. 調査主体者 秋田県教育委員会
5. 調査担当者 小林 克(秋田県埋蔵文化財センター文化財主任)  
小畑 嶽(秋田県埋蔵文化財センター学芸主事)
6. 調査事務担当者 片川 清(秋田県埋蔵文化財センター主査)  
佐々木真(秋田県埋蔵文化財センター主任)
7. 調査協力機関 建設省東北地方建設局能代工事事務所、八竜町教育委員会

## 第2章 遺跡の立地と環境

### 第1節 遺跡の位置と周辺地形

館の上館遺跡は、県北日本海沿岸地域の台地群のうち、最も西側に位置する「成合台地」と呼ばれる標高20~35mの海成段丘上に位置している。この台地は、西側を浅内低地、東側を鶴川川が形成した鶴川低地に挟まれ、幅約2.3km、長さ約8kmで八竜町大曲から能代市浅内まで延びる。その長軸方向は日本海汀線及び東側の丘陵地に平行するN-15°-Eである。

遺跡は八郎潟残存湖の北岸に接するこの成合台地の南端、米代川の河口から南に13.5km、八郎潟北岸からは北東に約2km程の地点に位置する。西側日本海汀線までは直線距離で3.5km程離れている。遺跡の経緯度は以下のとおりである。

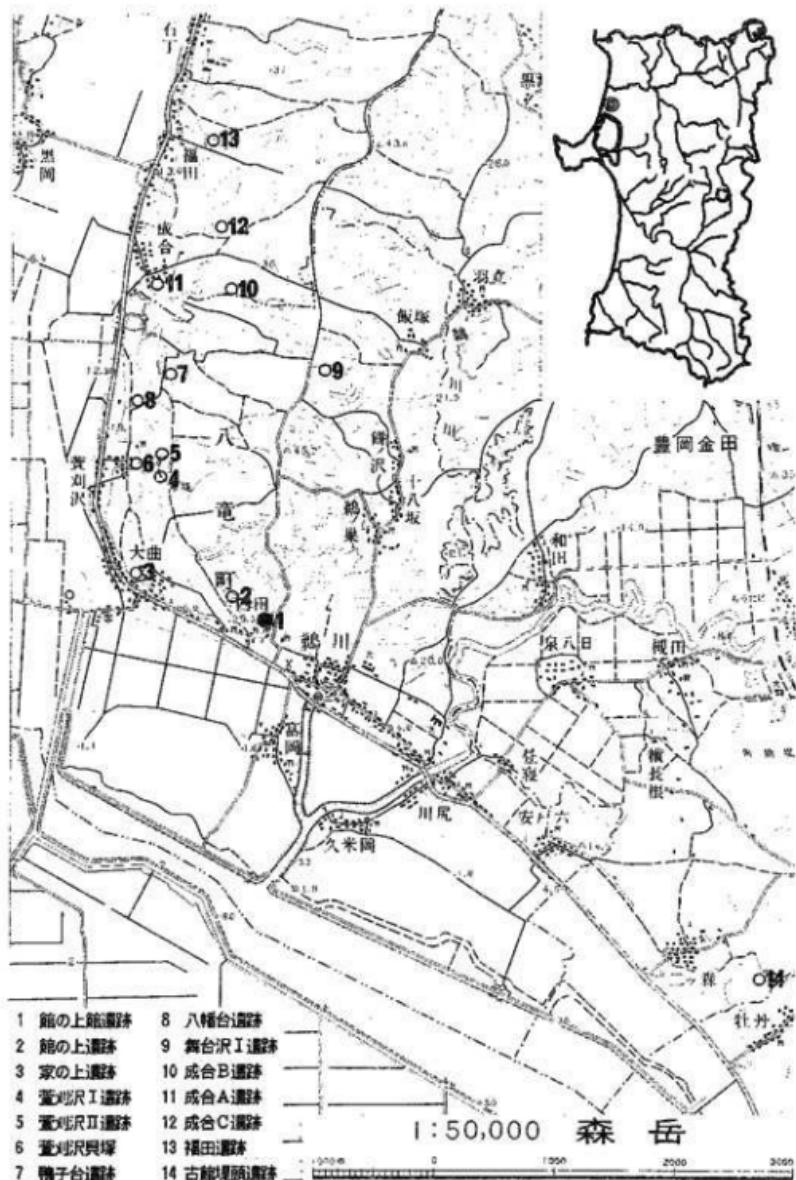
北緯 40° 6' 00" 東経 140° 1' 30"

成合台地の西縁は繩文海進時の日本海汀線で、直線的な地形を呈するが、東縁は海退後に侵食した鶴川川に向かっての小侵食谷が鋸歯状に入り、侵食谷間に形成された細長い舌状台地が密に並ぶ対照的な地形を呈している。館の上館遺跡はこうした小侵食谷群のうち最も南側に位置する谷によって画された、東に張り出す舌状台地を巧みに利用してつくられた中世城館である。

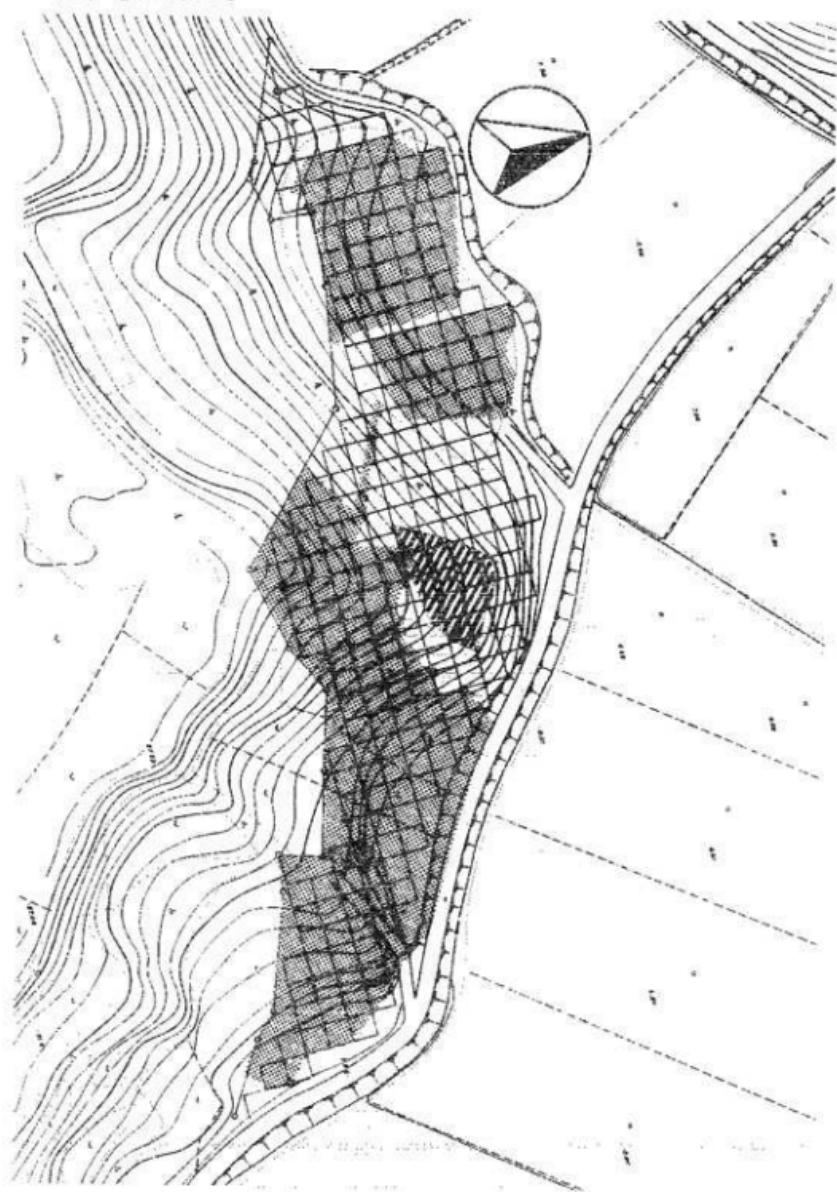
### 第2節 周辺の遺跡

館の上館遺跡の周辺には、琴丘能代道路建設工事に伴って発掘調査された遺跡を含め、いくつかの遺跡の存在が知られている。

IH石器時代の遺跡としては館の上館遺跡の北北西2.2kmの地点に鶴子台遺跡がある。ナイフ形石器を主とする石器群1ブロックと両面調整石器、周縁加工搔器からなる石器群1ブロックが確認されている。繩文時代の遺跡では約1.7km北西に萱刈沢貝塚、萱刈沢Ⅰ遺跡、萱刈沢Ⅱ遺跡がある。萱刈沢貝塚は繩文時代中期の円筒上層b式、c式を中心とする貝塚で、堅穴住居址やフ拉斯コ状土坑中に堆積したヤマトシジミを主体とする貝殻中から、成人女性および性別不明の青年人骨の他、犬の埋葬骨も出土している。萱刈沢Ⅰ遺跡、同Ⅱ遺跡は萱刈沢貝塚の東に隣接する遺跡で、前者では繩文時代後期前葉の上器捨場、後者では前期から中期にかけての堅穴住居址、フ拉斯コ状土坑が確認されている。平安時代の遺跡としては本遺跡の北4kmに堅穴住居址16軒を確認した福田遺跡がある。



第1図 館の上館遺跡の位置と周辺遺跡



第2図 調査区全体図(縮尺1/1000)

調査範囲

耕地造成のため削平された範囲

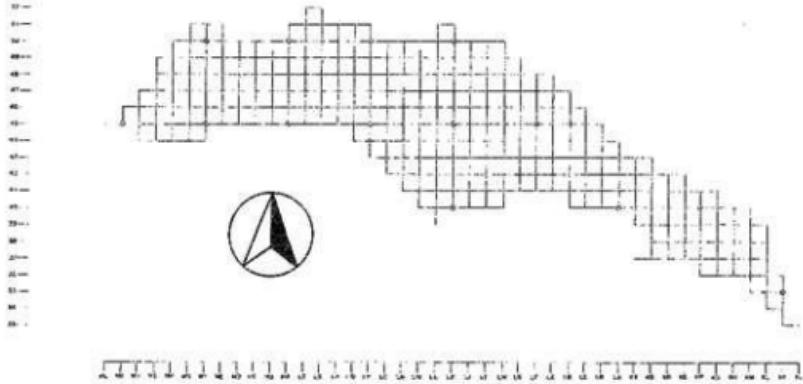
### 第3章 発掘調査の概要

#### 第1節 遺跡の概観

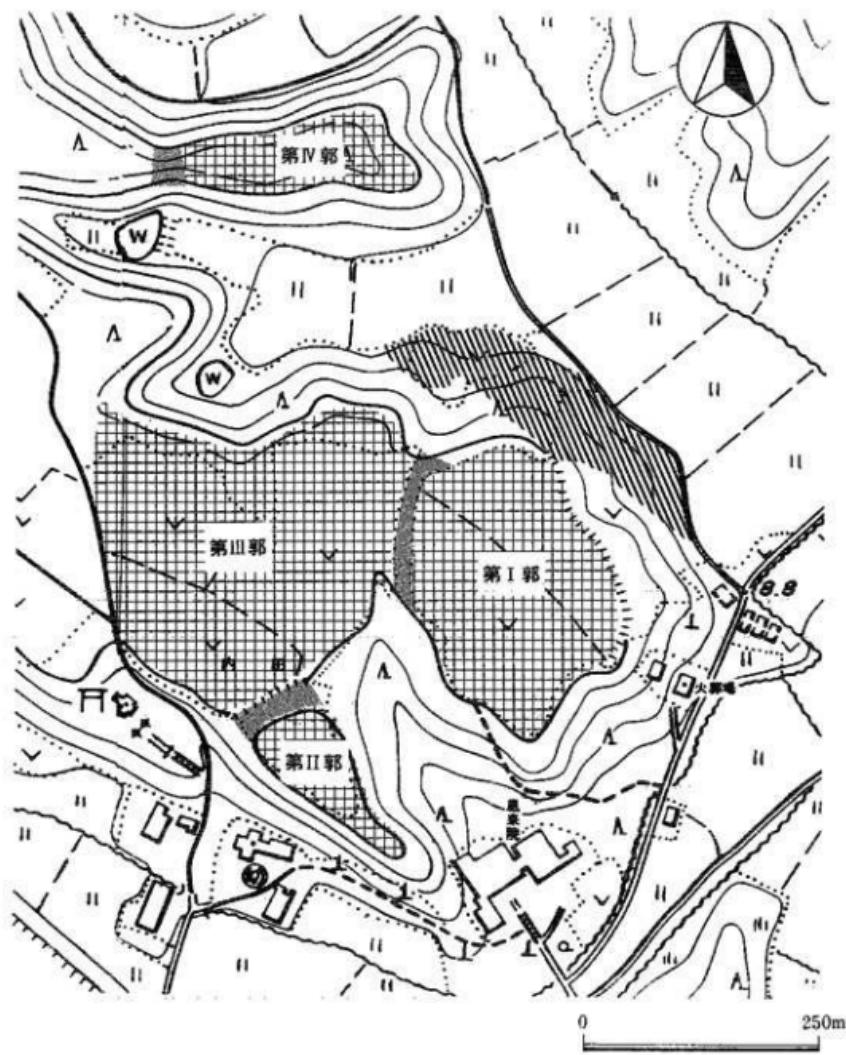
館の上館遺跡は成合台地の南端部分を空堀によって区切った4つ郭面(第4図第Ⅰ郭～第Ⅳ郭)からなる。現在確認できる空堀は3箇所にあり、そのうち、第Ⅰ郭と第Ⅲ郭の間、第Ⅱ郭と第Ⅲ郭の間の空堀は現状での基底幅7～8m、郭面からの深さ3m前後の大規模なものである。対して第Ⅳ郭を区切る空堀は上面での幅が2m前後、深さ1mの溝状の掘込みが2本並列し、その間に土堤状の高まりを見せる小規模なもので、他の空堀とは構築時期に差があるように見られる。

今回調査の対象となったのは第Ⅰ郭の北東側の平坦面、および斜面、斜面下の平坦部である。第Ⅰ郭の周辺北側から東側にかけては現在畑と山林に利用されており、中世城館の周辺施設としての地形を確認できる部分は殆どないのであるが、今回調査にかかった北東側の平坦面はほぼ同じ高さで第Ⅰ郭と第Ⅲ郭の間の空堀に連続しており、第Ⅰ郭帶郭の唯一の遺存箇所である。調査の結果、この帶郭平坦面上に時期を越えて構築された6条の溝と、1基の地下式土坑が確認された。

遺跡の層位は、帶郭上面、その南東側および北西側斜面、斜面下の平坦面で異なるが、南東側斜面でみると、Ⅰ層：耕作土(盛土を含む)、Ⅱ層：褐色砂質土、Ⅲ層：暗オリーブ褐色シルト質土、Ⅳ層：黒褐色シルト～粘土、Ⅴ層：黒褐色粘土、Ⅵ層：オリーブ黑色粘土の層順がたどれる。帶郭南東側斜面での出土遺物はすべて郭上面からの転落遺物、あるいは郭面造成に伴っての削土とともに斜面下に流入したものであるが、中世陶器類はⅣ層中から、縄文時代後続期の土器はⅤ層中から出土している。

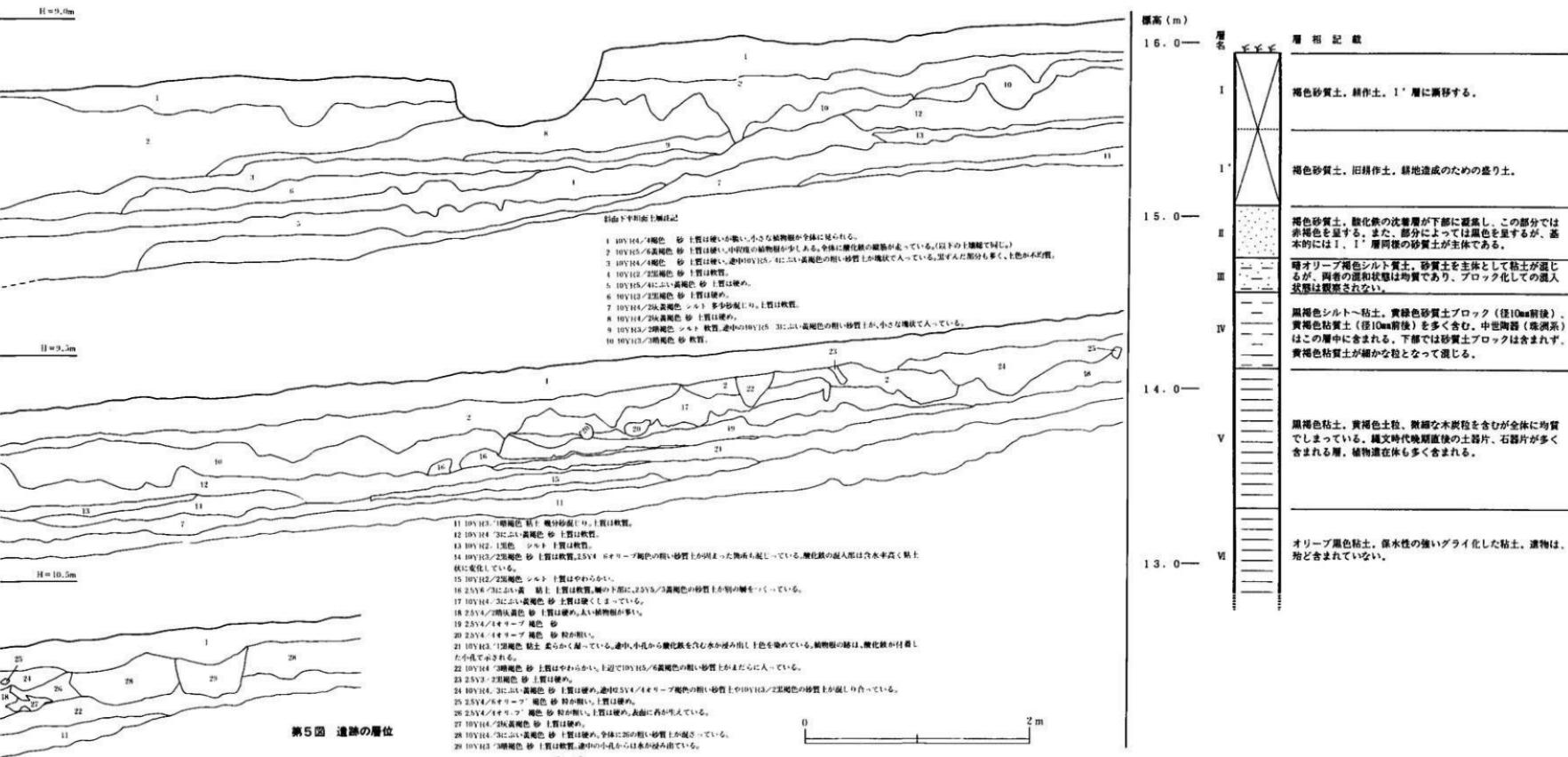


第3図 グリッド配置図



第4図 銚の上遺跡郭面配置図

||||| 郭面  
..... 空堀  
\\\\\\\\ 今回の調査区



## 第2節 調査の方法

調査は調査区全域にかかるように4mの基盤状の格子を組むグリッド方式によった。すなわち、調査区内に定めた基準点（路線中心杭NO.135）から座標北方向に設定された基準線と、それに直交する東西方向の基準線を二次元の座標軸のそれぞれとして両軸に4m毎に刻みを設け、その刻みを通る直線の交点に打設した杭によって4m四方の区画を設定した。東西、南北両基準線に設けられる刻みには、西から東に向かってLR・L S・LT・MA・MB→MT・N A・NB→NEと2文字のアルファベットと、南から北に向かって07→59と昇順する2桁の数字を振り当てて、グリッド四隅の交点にあてられるこのアルファベットと算用数字の組み合わせのうち、南東隅のものを各グリッドの呼称名とした。

粗掘り作業はこのグリッド毎に行つたが、調査区外に排土を搬出することができなかつたため、北西側斜面下および南西側斜面下の平坦面の調査をおこなつた後、帶郭上面の調査をおこなつて既調査部分での排土処理をおこなつた。

遺構は検出順に通し番号を付し、遺構種別を表すアルファベットとの組み合わせで呼称している。検出した遺構については覆土觀察用のベルトを残して掘り進んでいる。遺構記録は主に実測図作成と写真撮影によっておこない、平面および上層断面を記録した。平面作図は方眼杭を用いた簡易造り方測量でおこなつていて、写真は、遺構検出時の確認状況、断面形の覆土堆積状態、遺物出土状況、完掘状態というように精査の段階毎に撮影をおこなつていて、フィルムは基本的に35mmのモノクロとリバーサルフィルムを用い、随時ネガカラーフィルムでの撮影も加えた。また、遺跡遠景撮影にはプロニー版フィルムも用いている。

遺物は、遺構内外出土遺物の全点の出土位置を簡易造り方測量で計測することとし、取り上げ順の通し番号で遺物取り上げ台帳に記録した。記載項目は1. 遺物番号、2. 出土グリッド、3. 出土層位(出土遺構)、4. X座標、5. Y座標、6. Z座標、7. 種別、8. 取り上げ日月、9. 備考の9項目であり、うち、X座標はグリッド名を示す南東隅の座標から西への距離、Y座標は同じく北への距離、Z座標は標高を指す。また、遺物の取り上げに際しては、遺跡略号、遺物番号、出土グリッド(出土遺構)、出土層位、取り上げ年月日をラベルに記入している。

## 第3節 調査の経過

6月1日より調査を開始する。調査区の刈払い作業から開始し、遺跡遠景写真撮影などもおこなう。6月2日、北西側斜面下平坦面から粗掘り作業に着手する。この区域南側の斜面に近い側では表土の厚さは薄く、10cm前後で褐色の砂質土に到達する。表土中からは現代の鉄釘、砥石や、繩文施文七器の細片などが出土する。6月4日、北西側斜面下平坦面の北側、水田に近い部分では表土は30cm前後あることが確認される。表土下の褐色砂質土まで耕作が及んでおり、その上面で

現代の遺物(ビニール片等)が出土しているほか、須恵器片も少量出土する。6月5日、表土下の褐色砂質土面は南から北に向かって比高1m前後で傾斜していることが確認される。また、この褐色砂質土面で円形の土坑状のプランや、灰白色粘土の広がりなどが確認されるが、これらはいずれも現代の耕作による擾乱痕跡であることが後日確認される。また、褐色砂質土上面から文久永宝、播鉢片など、近世の遺物が出土する。6月15日、木目列点文、刷毛目旋、3条以上の平行沈線文のある上器が北西側斜面下平坦面で出土する。6月19日、基盤層と思われていた褐色砂質土中から土器片や繩文施文の上器片、石器片が出土し、この地点での包含層の成因が第1郭本郭造成時の排水流入であることが明らかになり、さらに掘り下げられることが確認された。6月25日、北西側斜面下平坦面での基盤層(青灰色粘土層)までの掘り下げを、ほぼ全域にわたって終え、6月26日、調査区を南東側斜面下へ移動する。7月2日、南東側斜面下の南端で表土下1m前後の箇所で青磁洒海壺が出土する。さらに、7月6日にはLB40区で珠洲系播鉢片、LB39区で壺の破片が出土する。7月13日、南東側斜面下の平坦面を掘り始める。珠洲系播鉢片が出土する。7月15日、一部の作業員を帶郭上面に移動し、その部分での粗耕作業を開始する。7月20日、南東側斜面下平坦面での基盤層上面も北西側斜面下平坦面の基盤層と同じく、北側水田に近い部分では表土から1m前後の深さがあり、郭面からの斜面が緩くなりながら続いていることが確認された。7月24日、南東側斜面上のLE41区を中心とした部分で、表土下2mに黒褐色粘土層が検出され、比較的まとまった量の繩文施文の壺形土器、浅鉢形土器、瓶形土器の破片が出土する。8月6日、南東側斜面および斜面下での調査をほぼ終える。この区域でも北西側斜面下と同様に遺構の検出はなく、また、中世城館の付帯施設の確認もおこなえなかった。8月7日、帶郭上面の表土をほぼ全面にわたって30~40cmほど除く作業をほぼ終える。残存する帶郭の先端部分では表土下に堅くしまった砂層(渴西層)が確認されているが、第1郭本郭に近い側は全体に幾分軟質で木炭等が混じった土である。休暇明けに帶郭上面を横断する形で基盤層確認のためのトレンチをいれることとする。8月17日、帶郭上面を横断するようにほぼ東西に土層観察用のトレンチをいれる。トレンチには渴西層を大きく掘り込んだ断面が現れ、第1郭本郭に近い帶郭上面を大きく窪ませるような遺構存在が確認される。8月18日、帶郭上面の土層観察用トレンチから南側をボーリング棒によって探る。探査の結果、基盤層が帶状にうねることを確認し、数条の溝状の遺構であることが予測される。8月19日、土層観察用トレンチから南側をトレンチに直交する形でのベルトを残して掘り始める。調査中に青磁碗片、錢貨が出土する。8月26日、帶郭上面の溝跡をほぼ掘り上げ、6条の溝跡が重複してあったことを確認する。8月27日、溝跡の西側延長部、斜面に向かって曲折した部分で、溝跡を覆っていたのと同様のやや軟質の砂質土に覆われた土坑を確認し、掘り上げる。8月31日、帶郭上面の溝跡、土坑の実測図作成作業を始め、9月5日までに作図作業を終える。9月7日、遺跡遠景写真を撮影して調査を終える。

## 第4章 調査の記録

今回の調査で出土した遺物の帰属時期には大きく分けて、繩文時代に後続する時期、平安時代を中心とした古代、中世、近世の四つの時期がある。調査区内でのそれらの分布をみると、ある範囲をもって遍在する傾向が認められるものの、その出土位置に本来的位置が示されるというものではなく、それらは基本的に郭面からの転落遺物と考えられる。ことに中世以前の遺物については、後節の遺構に記すように、大規模な郭面の造成および作り替えの継続した營為の結果、拂土とともに流下したものが相当に上るものと考えられる。

### 第1節 繩文時代後続期の遺物

#### (1) 土器

その特徴から繩文時代後続期としる土器は、館の上館遺跡第1郭帯郭の東西両肩部分、すなわちLE41区を中心とした南東側斜面中腹と、LN42区を中心とした北西側斜面上部、および北内斜面下平坦面のいっかくLR50区を中心とした区域、南東側斜面下平坦面いっかくのKS42区を中心とした区域の、4箇所で出土している。出土した土器には浅鉢、鉢、壺、蓋、甕があるが、器種によって遍在する傾向はない。また、出土土器はごく大まかに繩文時代直後の時期と天王山式期に分けられるが、これらの間でも分布上の際だった差ではなく、量的に少ない天王山式期の土器をみても調査区内に散在し、集中する傾向は認められない。

##### 浅鉢形土器（第6図1～第7図22）

浅鉢形土器には波状口縁のもの(1～4, 8～10, 19)と平縁のもの(5～7, 11, 12, 20, 22)がある。前者は口縁～体部が外反する傾向にあり口縁部と体部とで屈曲する(1～4, 19)。後者は内轉しながら立ち上がり、屈曲をもたない(5, 11, 12, 20, 22)。体部には変形工字文(4, 5, 8, 9, 13, 21)、鋸歯状沈線文(6, 7)および平行沈線文(10～12, 14～16, 18)、磨消繩文(19, 20)が施される。細い横線で変形T字文、平行沈線を施す土器には器面調整に刷毛目を用いるもの(8, 9, 14, 15, 18)も含まれ、壺形土器に特徴的な短沈線列を加える例(15, 16)もある。また磨消繩文を施す土器(19, 20)に連続して、文様帶の下限を縦位の短沈線を満たした帶状文によって画する土器(17)もある。他に全面を刷毛目で覆った土器(22)がある。

##### 鉢形土器（第8図23～第9図41）

鉢形土器には口縁以下体部まで直線的に下りるもの(23～27, 34)、口縁上端が屈曲外傾して(28～33)体部上半に膨らみをもつもの(28～33, 35～40)がある。前者は平縁であるが(23)、後者には波状口縁のもの(28)も含まれる。体部の文様は変形工字文(23～25, 29, 34, 36～40)と、

平行沈線を基本とし(28, 30~33)反転させて連結するもの(31, 32)がある。浅鉢形土器と異なり、刷毛目調整を施すものはない。

#### 壺形土器 (第9図42~第13図98, 第17図145~152)

壺形土器には縄文時代直後の時期におかれるもの(42~98)と、交互刺突文(152)を特徴とする天王山式期におかれるもの(145~152)とがある。

縄文時代直後の壺形土器には広口壺形土器と中間的な形態を示すもの(42~47)、口縁部と体部の間に直立する頸部をもつもの(49, 50, 60)、口縁部が外反外傾し体部がその上半で膨らむもの(51~59, 61~78, 83)、口縁がごく短く外傾するもの(79~81, 84)、口縁の内傾するもの(82)がある。口縁の形状は平縁のものが圧倒的に多いが、広口壺と中間的な形態を示すもの(42~43, 46, 47)や、口縁全面を縄文施文とするもの(48)、直立する頸部をもつもの(49)に波状口縁のものがある。口唇部は縄文が施文されたり(60, 64~67, 70)、刷毛目工具の圧痕列(61, 84)、刻目列(69, 83)が施されたりするが、口縁部に縦位の刷毛目を施すものは(51~59)、口縁上端外而に縄文を施文するものがあるものの、口唇部断面は丸みを帯びるか、薄手につくられるかしておらず、基本的にその上面への施文はない。体部はLR縄文を横位回転施文するものが大半であるが、斜位の刷毛目調整を縄文施文前に加えたものもあり、縄文を欠く場合(83, 84)もある。

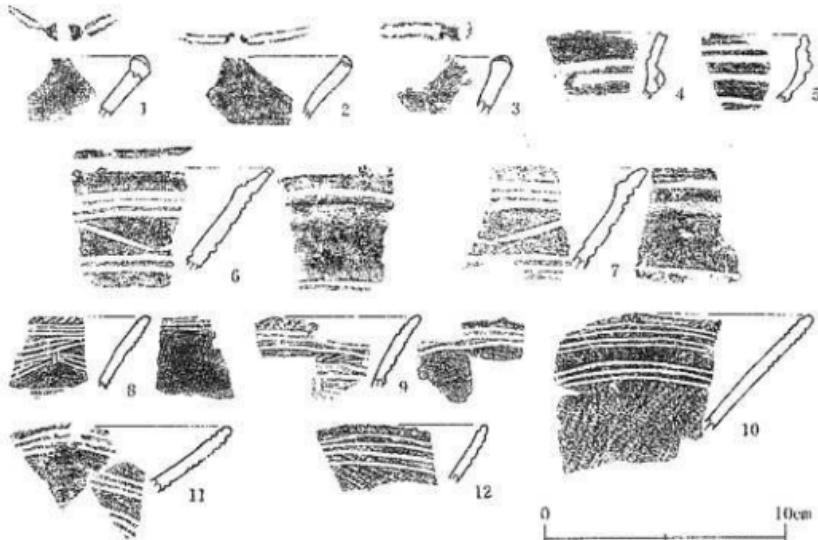
天王山式期におかれる壺形土器は内弯外傾する口縁をもち、口縁部文様帶、頸部文様帶、体部文様帶の3つの文様帶をもつことが特徴である(145, 152)。口縁部文様帶には縄文地に1~2条の沈線によって上向きの連弧文(145, 146)や、波状文(152, 153)が施され、頸部にも同じく縄文地に2条の沈線で弧線文を用いた文様(145, 147~150)や、同じく弧線文を組み合わせた磨消縄文(151~152)が描かれる。体部は2~3条の上向きの連弧文(145, 152)が施される。

#### 壺形土器 (第13図99~第16図141)

壺形土器は口頸部の外反外傾する広口のもの(99~108)、口縁部が短く直立するもの(128)、無頸のもの(129)、頸部で狭まるもの(141)がある。広口壺は全て口頸部が無文であり、頸部と体部の間の屈曲部には平行沈線および刷毛目工具の連続圧痕文(木目列点文)を施すものが多い。体上半部は刷毛目調整を施した後に体下半との間に2~4条単位の平行沈線を巡らし、縦位区画沈線を加えるなどした後にミガキ調整を施すものや、全面縄文を施文するもの、また全面ミガキ調整で無文となるものなどがある。平行沈線には刷毛目工具の連続圧痕文が施される場合があるが、これに代わって、棒状工具による連続刺突列を3段に施すもの(124~126)もある。

#### 蓋 (第16図142~144)

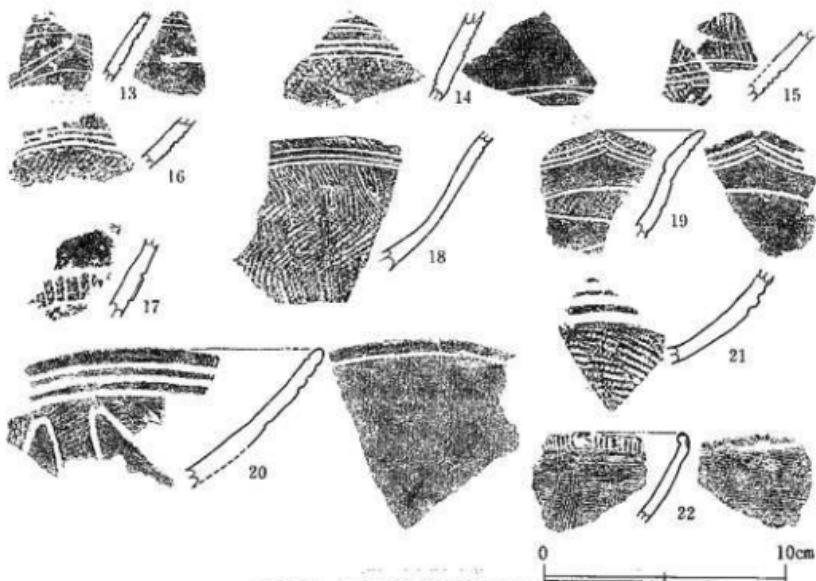
傘形となるもの(142)、台形となるもの(143, 144)がある。台形のものではその上面および側面に平行沈線による文様を施している。



第6図 横文時代後続期の土器(1)

第1表 縄文時代後続期の土器観察表(1)

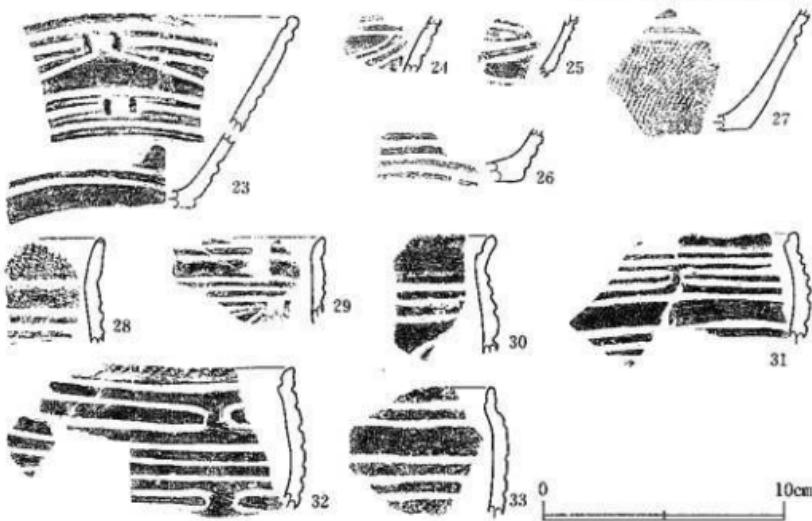
番号	出土	器種	部位	歩	西	内	東	表面の特徴	口部施設
1	LX42	6	浅鉢	1J	腹底のミカナによって半面に仕上げられている。ミカナの單孔が不明。	腹底部に横筋のミカナによって半面に仕上げられている。口縁に比較的多く单孔がある。	腹底部に横筋のミカナによって半面に仕上げられている。口縁に比較的多く单孔がある。	腹底部に横筋のミカナによって半面に仕上げられている。口縁に比較的多く单孔がある。	腹底部有り、小口縁
2	LM42	5.5	浅鉢	口	腹底のミカナによって半面に仕上げられている。口縁に横筋のミカナによって半面に仕上げられている。口縁に比較的多く单孔がある。	腹底のミカナによって半面に仕上げられている。口縁に横筋のミカナによって半面に仕上げられている。口縁に比較的多く单孔がある。	腹底のミカナによって半面に仕上げられている。口縁に横筋のミカナによって半面に仕上げられている。口縁に比較的多く单孔がある。	腹底部有り、小口縁	
3	LN42	3	浅鉢	1J	腹底のミカナによって半面に仕上げられている。口縁に横筋のミカナによって半面に仕上げられている。	腹底に横筋のミカナによって半面に仕上げられている。口縁に横筋のミカナによって半面に仕上げられている。	腹底に横筋のミカナによって半面に仕上げられている。口縁に横筋のミカナによって半面に仕上げられている。	腹底部有り、小口縁	
4	LD42	3.5	浅鉢	1J	腹底に横筋のミカナによって半面に仕上げられている。口縁に横筋のミカナによって半面に仕上げられている。口縁に比較的多く单孔がある。	腹底に横筋のミカナによって半面に仕上げられている。口縁に横筋のミカナによって半面に仕上げられている。口縁に比較的多く单孔がある。	腹底に横筋のミカナによって半面に仕上げられている。口縁に横筋のミカナによって半面に仕上げられている。	腹底部有り、小口縁	
5	HN42	5.5	浅鉢	C1	腹底に横筋のミカナによって半面に仕上げられている。口縁に横筋のミカナによって半面に仕上げられている。	腹底に横筋のミカナによって半面に仕上げられている。口縁に横筋のミカナによって半面に仕上げられている。	腹底に横筋のミカナによって半面に仕上げられている。口縁に横筋のミカナによって半面に仕上げられている。	腹底部有り、小口縁	
6	LE41	6	浅鉢	1J	口縁に3条の平行線があり、その下に3条の平行線がある。	口縁に3条の平行線があり、その下に3条の平行線がある。	口縁に3条の平行線があり、その下に3条の平行線がある。	口縁から全体部まで斜面して下りて浅鉢とし、口部は直い。	口部に直角切
7	LE41	6	浅鉢	1P	口縁に3条の平行線があり、その下に3条の平行線がある。	口縁に3条の平行線があり、その下に3条の平行線がある。	口縁に3条の平行線があり、その下に3条の平行線がある。	口縁から全体部まで斜面して下りて浅鉢とし、口部は直い。	口部に直角切
8	LE42	5	浅鉢	口	口縁に3条の平行線があり、その下に3条の平行線がある。	口縁に3条の平行線があり、その下に3条の平行線がある。	口縁に3条の平行線があり、その下に3条の平行線がある。	口縁から全体部まで斜面して下りて浅鉢とし、口部は直い。	口部に直角切
9	LE42	5	浅鉢	口	口縁に3条の平行線があり、その下に3条の平行線がある。	口縁に3条の平行線があり、その下に3条の平行線がある。	口縁に3条の平行線があり、その下に3条の平行線がある。	口縁から全体部まで斜面して下りて浅鉢とし、口部は直い。	口部に直角切
10	LN42	4.5	浅鉢	口	口縁に3条の平行線があり、その下に3条の平行線がある。	口縁に3条の平行線があり、その下に3条の平行線がある。	口縁に3条の平行線があり、その下に3条の平行線がある。	口縁から全体部まで斜面して下りて浅鉢とし、口部は直い。	口部に直角切
11	LN42	5	浅鉢	口	口縁に3条の平行線があり、その下に3条の平行線がある。	口縁に3条の平行線があり、その下に3条の平行線がある。	口縁に3条の平行線があり、その下に3条の平行線がある。	口縁から全体部まで斜面して下りて浅鉢とし、口部は直い。	口部に直角切
12	LN42	5	浅鉢	口	口縁に3条の平行線があり、その下に3条の平行線がある。	口縁に3条の平行線があり、その下に3条の平行線がある。	口縁に3条の平行線があり、その下に3条の平行線がある。	口縁から全体部まで斜面して下りて浅鉢とし、口部は直い。	口部に直角切



第7図 繩文時代後続期の土器(2)

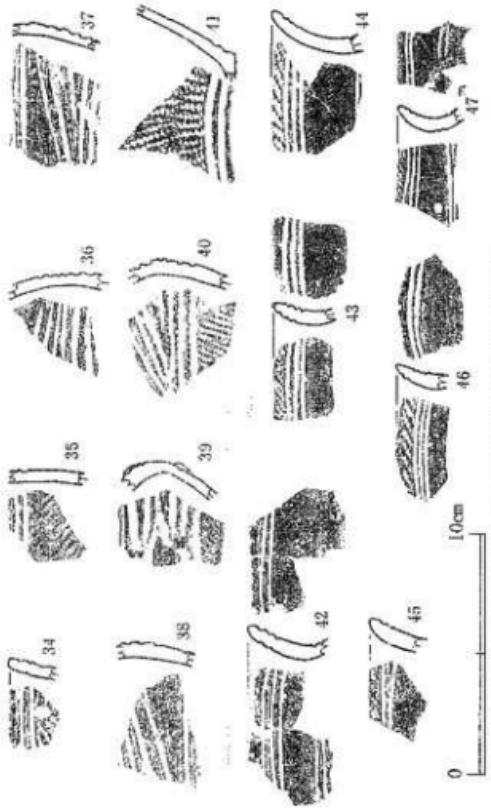
第2表 繩文時代後続期の土器観察表(2)

番号	出土区	因縁	器形	部位	表面		形制下の特徴	口唇部形状
					内面	形制下の特徴		
13	L.N43	5	浅鉢	体	C面:上端を大きく斜めに切った、細かい直筋の継ぎ合いで形成された。口唇下に3条の深い平行凹溝が認める。	口唇下は直筋で形成された。直筋の下部には、斜めに走る3条の凹溝がある。	直筋的な体部をもつ浅鉢形土器。	
14	L.Q47	6	浅鉢	体	斜面:外縁部に斜めに切られた、細かい直筋の継ぎ合いで形成された。口唇下に3条の深い平行凹溝が認める。	口唇下は直筋で形成された。直筋の下部には、斜めに走る3条の凹溝がある。	直筋的で外縁部に斜めに切られた、直筋の下部には、斜めに走る3条の凹溝がある。	
15	L.N42	5.5	浅鉢	体	斜面:外縁部に斜めに切られた、細かい直筋の継ぎ合いで形成された。口唇下に3条の深い平行凹溝が認める。	口唇下は直筋で形成された。直筋の下部には、斜めに走る3条の凹溝がある。	直筋的で外縁部に斜めに切られた、直筋の下部には、斜めに走る3条の凹溝がある。	
16	L.N41	5.5	浅鉢	体	化粧土:上端部に斜めに切られた、細かい直筋の継ぎ合いで形成された。口唇下に3条の深い平行凹溝が認める。	口唇下は直筋で形成された。直筋の下部には、斜めに走る3条の凹溝がある。	直筋的で外縁部に斜めに切られた、直筋の下部には、斜めに走る3条の凹溝がある。	
17	L.N41	7.5	浅鉢	体	化粧土:外縁部に斜めに切られた、細かい直筋の継ぎ合いで形成された。口唇下に3条の深い平行凹溝が認める。	口唇下は直筋で形成された。直筋の下部には、斜めに走る3条の凹溝がある。	直筋的で外縁部に斜めに切られた、直筋の下部には、斜めに走る3条の凹溝がある。	
18	L.E41	6	浅鉢	体	化粧土:外縁部に斜めに切られた、細かい直筋の継ぎ合いで形成された。口唇下に3条の深い平行凹溝が認める。	口唇下は直筋で形成された。直筋の下部には、斜めに走る3条の凹溝がある。	直筋的で外縁部に斜めに切られた、直筋の下部には、斜めに走る3条の凹溝がある。	
19	R.S42	6	浅鉢	体	化粧土:外縁部に斜めに切られた、細かい直筋の継ぎ合いで形成された。口唇下に3条の深い平行凹溝が認める。	口唇下は直筋で形成された。直筋の下部には、斜めに走る3条の凹溝がある。	直筋的で外縁部に斜めに切られた、直筋の下部には、斜めに走る3条の凹溝がある。	
20	L.L50	7	浅鉢	体	化粧土:外縁部に斜めに切られた、細かい直筋の継ぎ合いで形成された。口唇下に3条の深い平行凹溝が認める。	口唇下は直筋で形成された。直筋の下部には、斜めに走る3条の凹溝がある。	直筋的で外縁部に斜めに切られた、直筋の下部には、斜めに走る3条の凹溝がある。	
21	L.N42	8	浅鉢	体	化粧土:外縁部に斜めに切られた、細かい直筋の継ぎ合いで形成された。口唇下に3条の深い平行凹溝が認める。	口唇下は直筋で形成された。直筋の下部には、斜めに走る3条の凹溝がある。	直筋的で外縁部に斜めに切られた、直筋の下部には、斜めに走る3条の凹溝がある。	
22	L.J41	5	浅鉢	口	化粧土:外縁部に斜めに切られた、細かい直筋の継ぎ合いで形成された。口唇下に3条の深い平行凹溝が認める。	口唇下は直筋で形成された。直筋の下部には、斜めに走る3条の凹溝がある。	直筋的で外縁部に斜めに切られた、直筋の下部には、斜めに走る3条の凹溝がある。	



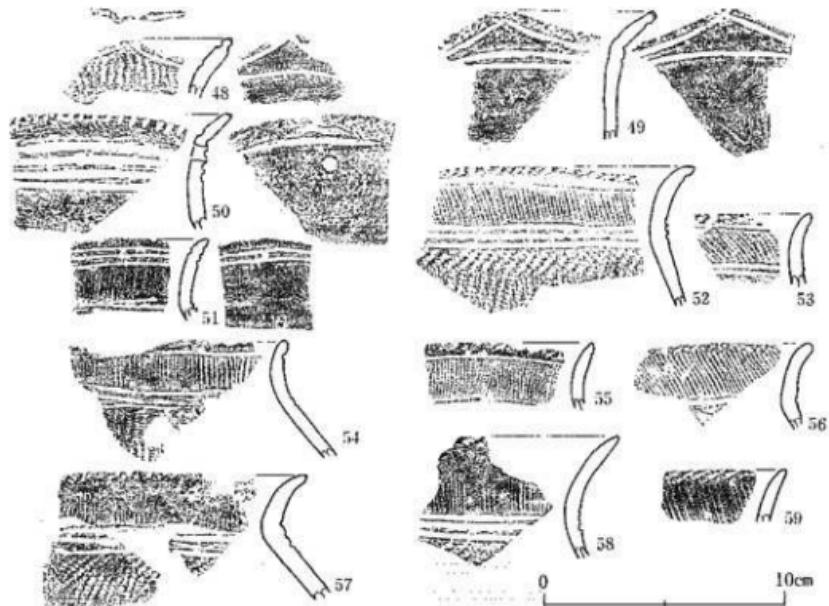
第8図 桶文時代後続期の土器(3)

第3表 縄文時代後続期の土器観察表(3)



第4章 繩文時代後縄期の土器類器表(4)

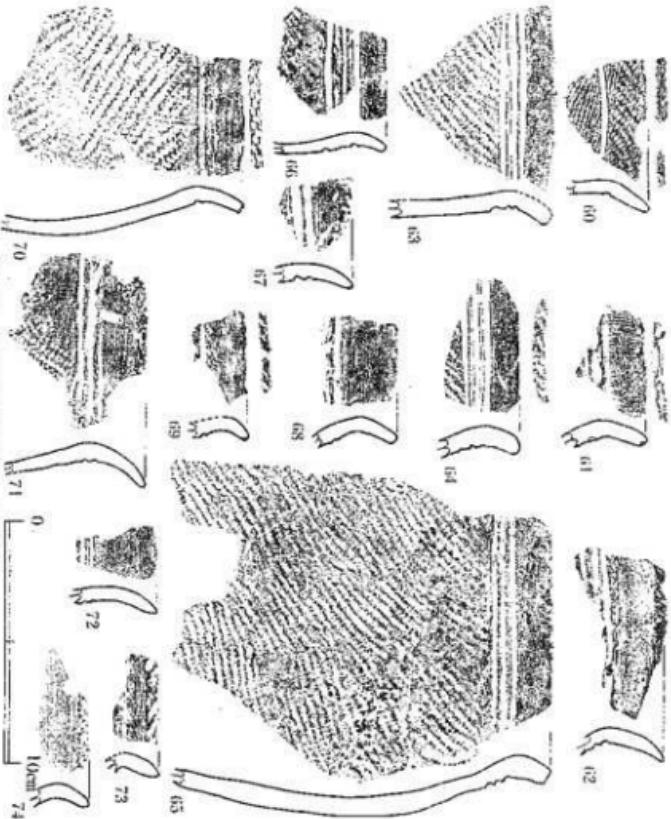
第4表 編文詩代後譲期の土器、觀操表(4)

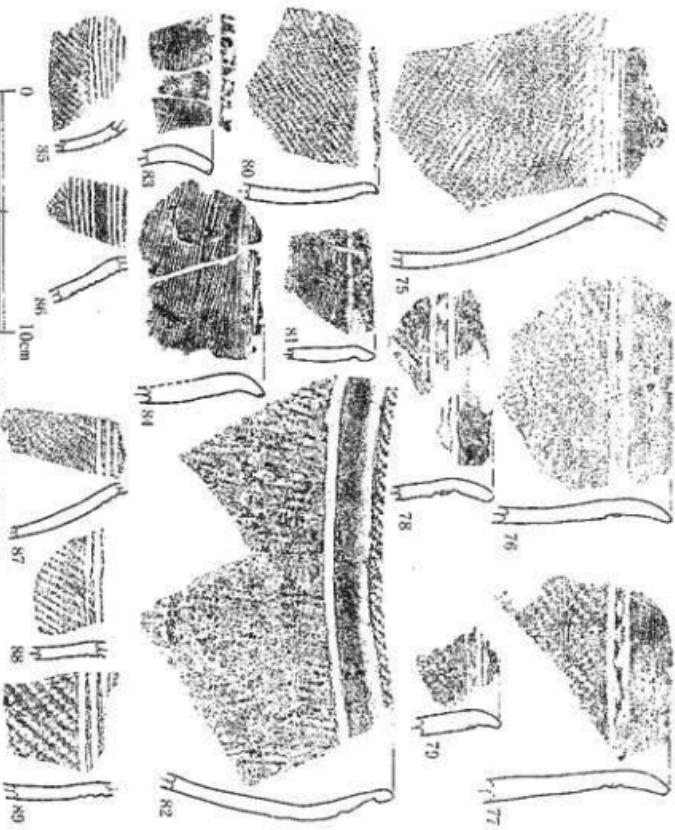


第10図 繩文時代後続期の土器(5)

第5表 繩文時代後続期の土器観察表(5)

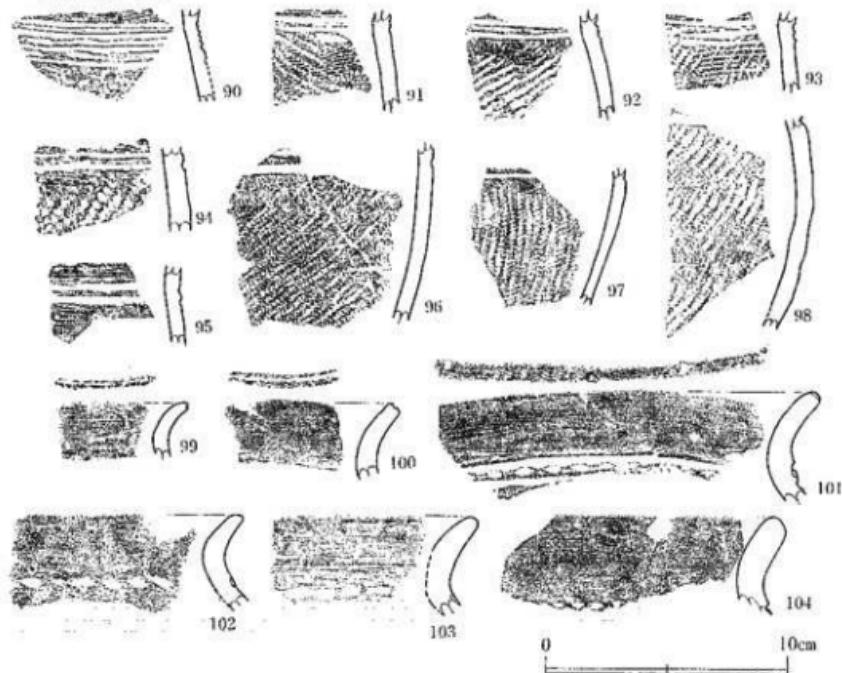
第11図 龍文時代後続期の土器調査表(6)





第7表 繩文時代後晩期の土器表(7)

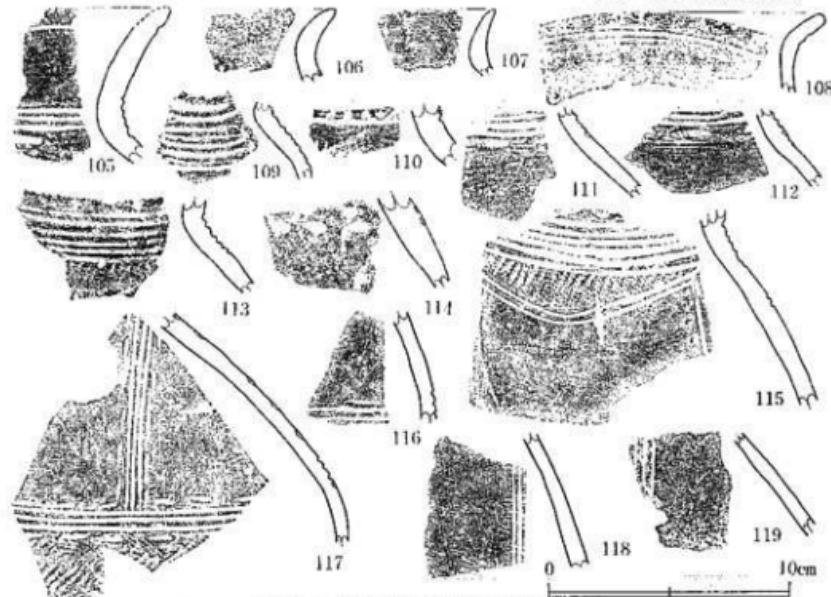
番号	出土地	形	器種	寸法	備考
25	40年 S.S.	刃 口	石刀	14.5×4.5×0.5	刃の先端は鋸歯状で、底面は斜面を有する。刃の側面は斜面を有する。
76	5CR22 7.1	刃 口	石刀	14.5×4.5×0.5	刃の先端は鋸歯状で、底面は斜面を有する。
78	5CR11 7.1	刃 口	石刀	14.5×4.5×0.5	刃の先端は鋸歯状で、底面は斜面を有する。
79	4CR 6.5	刃 口	石刀	14.5×4.5×0.5	刃の先端は鋸歯状で、底面は斜面を有する。
80	12M 3.5	刃 口	石刀	14.5×4.5×0.5	刃の先端は鋸歯状で、底面は斜面を有する。
81	12M 6.0	刃 口	石刀	14.5×4.5×0.5	刃の先端は鋸歯状で、底面は斜面を有する。
82	12M 6.5	刃 口	石刀	14.5×4.5×0.5	刃の先端は鋸歯状で、底面は斜面を有する。
83	12M 7.0	刃 口	石刀	14.5×4.5×0.5	刃の先端は鋸歯状で、底面は斜面を有する。
84	11M 8.0	刃 口	石刀	14.5×4.5×0.5	刃の先端は鋸歯状で、底面は斜面を有する。
85	12M 6.0	刃 口	石刀	14.5×4.5×0.5	刃の先端は鋸歯状で、底面は斜面を有する。
86	不明 5	全 体	石器	14.5×4.5×0.5	刃の先端は鋸歯状で、底面は斜面を有する。
87	12M 6.0	刃 口	石刀	14.5×4.5×0.5	刃の先端は鋸歯状で、底面は斜面を有する。
88	12M 6.0	刃 口	石刀	14.5×4.5×0.5	刃の先端は鋸歯状で、底面は斜面を有する。



第13図 縄文時代後続期の土器(8)

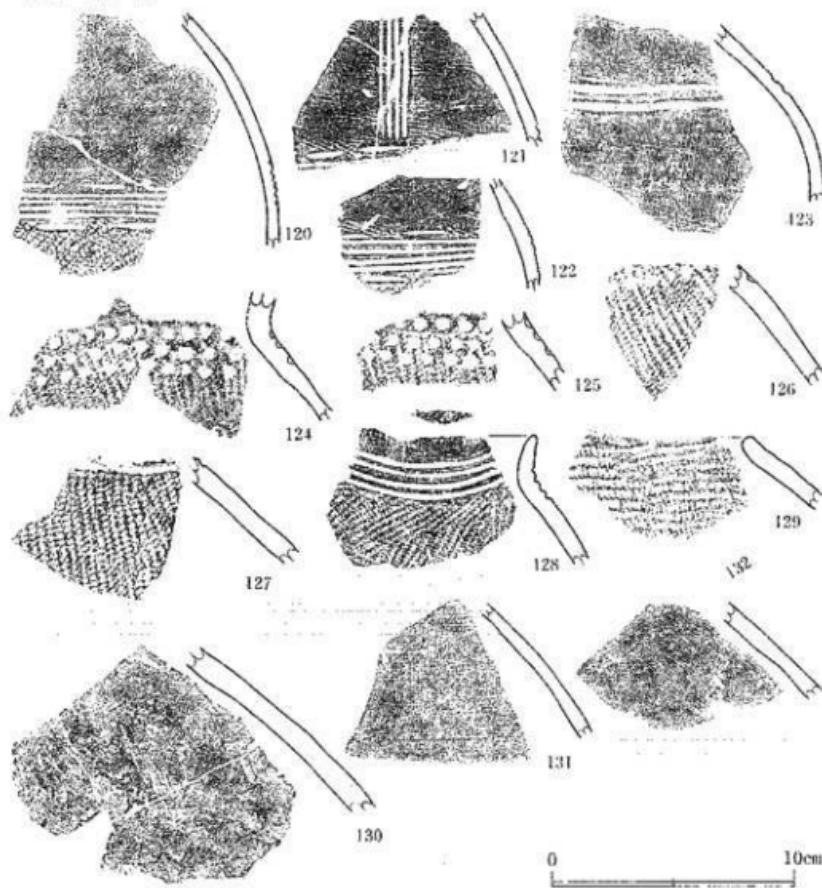
第8表 縄文時代後続期の土器観察表(8)

番号	出土場所	形態	周囲	表面	内部	形制上の特徴	口付部施設
90	KH42	6.5	臺	口付～輪郭には横ひの削れを有し、その他の 体部には、口縁部を横に走る直線である。口縁部と の間に、口付の内側を出す。北縫合のうち下 2段には、口付内側を直線である。	輪郭の内側の縫合は、周囲の 縫合よりは、内側の縫合が複雑である。		
91	KS42	7.5	臺	体部は、縦の明瞭な輪郭の底、口付、縫合を接続する。口縁部と の間に、口付の内側を直線である。口縁部との 間に、その下に木口付内側を直線である。	口縁部の内側の縫合は、周囲の 縫合よりは、内側の縫合が複雑である。		
92	JN43	7.5	臺	体部は、縦の明瞭な輪郭の底、口付、縫合を接続する。口縁部との 間に、口付の内側を直線である。	口縁部の内側の縫合は、周囲の 縫合よりは、内側の縫合が複雑である。		
93	LO42	6	臺	体部は、縦の明瞭な輪郭の底、口付、縫合を接続する。口縁部との 間に、口付の内側を直線である。	口縁部の内側の縫合は、周囲の 縫合よりは、内側の縫合が複雑である。		
94	JN43	8	臺	体部は、口縁部と縫合部を接続する。口縁部との 間に、口付の内側を直線である。	口縁部から体部へ縫合せず、口縫合部と の間に、2条の平行内縫合がある。		
95	LB41	7.5	臺	口縁部から体部へ縫合を施した後、口縫合部と の間に、2条の平行内縫合がある。	口縫合部から体部へ縫合せず、口縫合部と の間に、2条の平行内縫合がある。		
96	KH42	7.5	臺	体部は、口縫合部と縫合部を接続する。口縫合部と の間に、2条の平行内縫合がある。	口縫合部から体部へ縫合せず、口縫合部と の間に、2条の平行内縫合がある。		
97	KS42	5	臺	体部は、口縫合部と縫合部を接続する。口縫合部と の間に、2条の平行内縫合がある。	口縫合部から体部へ縫合せず、口縫合部と の間に、2条の平行内縫合がある。		
98	KH42	7.5	臺	体部は、口縫合部と縫合部を接続する。口縫合部と の間に、2条の平行内縫合がある。	口縫合部から体部へ縫合せず、口縫合部と の間に、2条の平行内縫合がある。		
99	KS42	7	直	口縫合部と縫合部を接続する。ナガ面鏡を施す。	ナガ面鏡を施す。	口縫合部から体部へ縫合せず、口縫合部と の間に、2条の平行内縫合がある。	直りの口付部を有する。
100	LR50	8.5	臺	口縫合部の内側を直線とする。	口縫合部の内側を直線とする。	口縫合部から体部へ縫合せず、口縫合部と の間に、2条の平行内縫合がある。	直りの口付部を有する。
101	JN43	8.5	直	口縫合部と縫合部を接続する。内縫合は、口縫合部と の間に、2条の平行内縫合がある。内縫合の内側を直線と して、外縫合は、口縫合部と縫合部と上部の内側を直線と して、内縫合の内側を直線とする。内縫合の内側を直線と して、外縫合は、口縫合部と縫合部と上部の内側を直線と して、内縫合の内側を直線とする。	内縫合の内側を直線とする。	口縫合部から体部へ縫合せず、口縫合部と の間に、2条の平行内縫合がある。	直りの口付部を有する。
102	JN42	8	直	体部と縫合部に木口付内縫合を施す。その後の表面は、 縫合部と縫合部との間に、2条の平行内縫合がある。	表面は、縫合部と縫合部との間に、2条の平行内縫合がある。	縫合部と縫合部との間に、2条の平行内縫合がある。	なし。
103	KH42	10.0	口	体部と縫合部に木口付内縫合を施す。その後に、縫合部の 内側を直線とする。	縫合部の内側を直線とする。	縫合部の内側を直線とする。	なし。
104	LE41	12	臺	体部と縫合部に木口付内縫合を施す。	体部の内側を直線とする。	体部の内側を直線とする。	なし。



第14図 縄文時代後続期の土器(9)  
第9表 縄文時代後続期の土器観察表(9)

番号	出土古跡名	基盤	部材	表 面	内 面	形制上の特徴	口器部施紋
105	LN42	9.5	素	口	縦に1箇所の切欠を施し、全体との境には3箇所の ギヤ調節が施される。	縦の1カ所調整が施される。	口縁一部外側する圓形土器。柄に比 べて底部まで長い。
106	KH42	8.5	素	口	全体との境に斜め吹きが施される。削り出しており、表面調 整の付跡が不明。	削りして表面調整の状態は不明。	口縁一部外側する圓形土器。底部に口縁より なじみで底部へ向かう。
107	LS19	9.5	素	口	横縫の1箇所の切欠が施される。	横縫のナナないしギヤ調整が 施される。	口縁一部外側する圓形土器。底部に口縁より なじみで底部へ向かう。
108	LN41	6	素	口	口縁下に浅い吹き穴を3箇所削させて施した後、横縫の ギヤ調節が施される。	横縫のナナ調節。	口縁一部外側する圓形土器。柄に比 べて底部まで長い。
109	LN42	7	素	体	縫合との境に1箇所の吹き穴を施し、以下に丁字文を切 く。丁字文は側面的な構造で上から吹き穴で挟み込 んで施す。	横縫の吹き口調節を施す。	口縁が大きい。
110	LN42	9.5	素	体	縫合との境に2箇所の平行吹き穴を施し、中間に竹管を以 てによる吹き穴を施す。底部、側面の1箇所調節が施され、 表面に斜め吹きが施された。	横縫の1カ所調節。	縫合との境に凸出する凸形土器。
111	LN40	6.5	素	口	縫合との境に1箇所の吹き穴を施し、その下に1箇所の吹 き穴を施す。その下に本口吹き穴が施される。その上に横縫の ギヤ調節が施され、表面調整が底部下に施されている。	横縫の1ナナないしナナ調節。	
112	LN42	8	素	体	番111と同一直角		
113	KH42	7.5	素	体	縫合との境に1箇所の吹き穴が施され、縫合後に斜 め吹きが施される。表面調整が施さず、側面に付いて施される。	横縫のナナ調節。	
114	LN42	10	直	体	縫合との境に1箇所の吹き穴を施し、2段で施して施され る。その上に横縫する縫合部、側面の1箇所調節が施す。 底と口縁との縫合部の間を斜め吹きした後、縫合部と側面 との縫合部に斜め吹きをして、その上に吹き穴を施す。そこ に横縫が付けて2段で施して施される。底と口縁との縫合 部の1箇所に斜め吹きをして施される。	横縫の1ナナ調節。	
115	KH45	7.5	素	体	縫合上に吹き穴を施す。口縁下に2箇所の縫合部とその上 に施される吹き穴が施す。これらに付いて施される側 面が認められる。吹き穴は底に付いて施される。	横縫の側面吹き調節の後、浅いナナ 調節。	
116	LN42	6	素	体	縫合上に吹き穴を施す。口縁下に2箇所の縫合部とその上 に施される吹き穴が施す。これらに付いて施される側 面が認められる。吹き穴は底に付いて施される。	横縫の側面吹き調節の後、浅いナナ 調節。	
117	不明	6	素	体	縫合の側面吹き調節の後、口縁下には八角形を施された 吹き穴がある。その上に吹き穴を施す。側面の1箇所調節が施され る。その上に斜め吹きが3箇所調節を施す。底部 は平行吹き。底下する平行吹き部の下の内縫合部に斜 め吹きを施す。その縫合部は平行吹きより上位の縫合 部の1箇所調節が施される。边缘の中及び本口吹き穴 中には地吹きが施される。	横縫のナナ調節。	
118	LN42	5.5	素	体	縫合の側面吹き調節の後、口縁下には斜め吹きが3箇所の調節を 施す。その上に斜め吹きが3箇所調節を施す。底部 は平行吹き。底下する平行吹き部の下の内縫合部に斜 め吹きを施す。その縫合部は平行吹きより上位の縫合 部の1箇所調節が施される。	横縫の1ギヤ調節。	
119	LN42	5	素	体	縫合部の内縫合部の後、底部に ギヤ調節が施されている。	横縫の1ギヤ調節。	



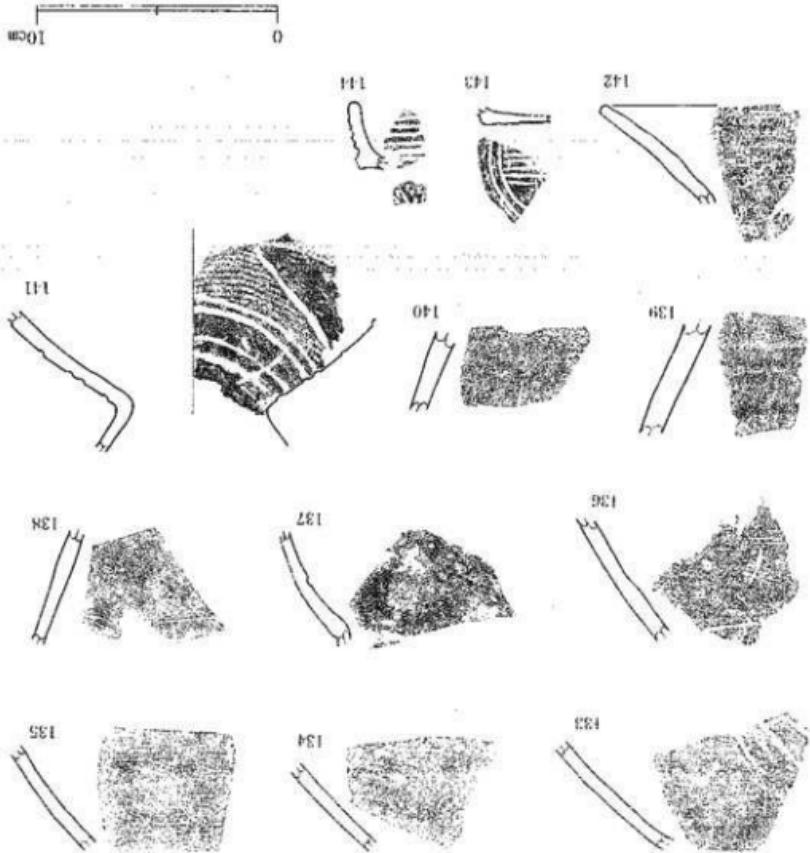
第15図 縄文時代後続期の土器(10)

第10表 縄文時代後続期の土器観察表(10)

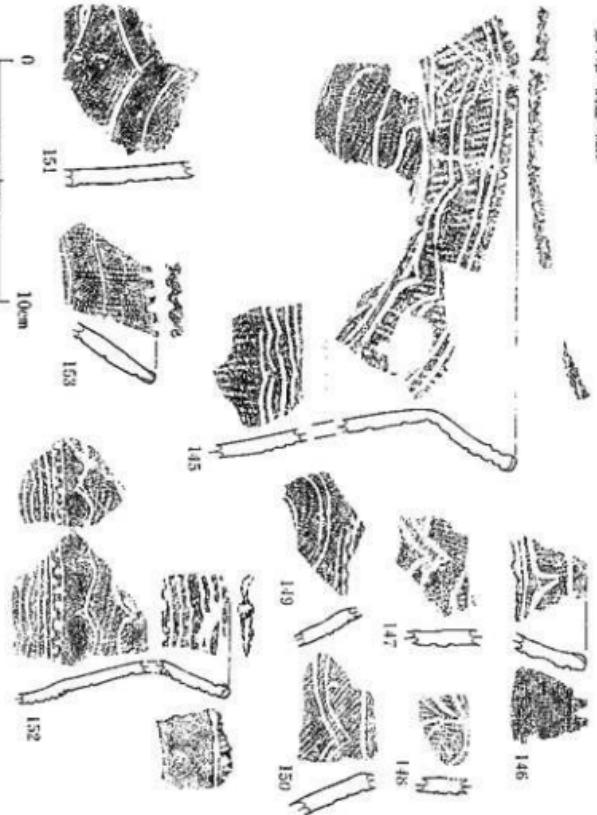
番号	出土地名	目印	形	表面	内面	毛利との特徴	白澤説
120	LM42	5.5	杏	縄文丸壺の底付部と腹と口部を残す。及び121-125の 片断部を含む。縄文丸壺の底付部の1角が残る。内面 は凹状である。その上に内面が残してある。縄文丸壺の底 付部の1角が残り、内面が残っている。			
121	LN42	5	盃	体	120と同。縄文		
122	LN42	5.5	盃	体	120と同。縄文		
123	KR42	6	杏	縄文丸壺の底付部の底付部に3条の平行溝線を残す。さ らに縄文の三段調節をしている。	縄文の底付部調節の底付部の1角が残る。		
124	LP42	8.0	杏	体	縄文に1角の調節を横穿する溝線があり、溝線との間に丸窓のや や丸い上によって3段の調節を残す。	横窓の1角が調節	
125	LE42	8	盃	体	124と同。縄文		
126	LP42	8	盃	体	124と同。縄文		
127	LN42	7.5	杏	縄文丸壺の底付部及び、底付部の1角が残る。縄文の1角が残る。			
128	KR42	8	杏	縄文丸壺の底付部及び、底付部の1角が残る。縄文の1角が残る。	縄文の1角が残る。表面に1角が残る。なし。		
129	LP42	7.5	盃	口部から下部腹を下へ右側斜する。口部が丸窓の1角が残る。下部腹の内面は 内面が残り、内面の1角が残る。	内面が残る。内面の1角が残る。		
130	KR42	8	盃	縦割の底付部の底付部の1角が残る。	縦割の底付部の底付部の1角が残る。		
131	LN42	6.5	杏	底付部の底付部の底付部の底付部の1角が残る。	縦割の底付部の底付部の底付部の1角が残る。		
132	KH42	5.5	杏	縦割の底付部の底付部の底付部の1角が残る。	縦割の底付部の底付部の底付部の1角が残る。		

#### 第11章 機文時代後期の土器叢業(II)

第16圖 諸文明代鐵錢期的土壤(11)

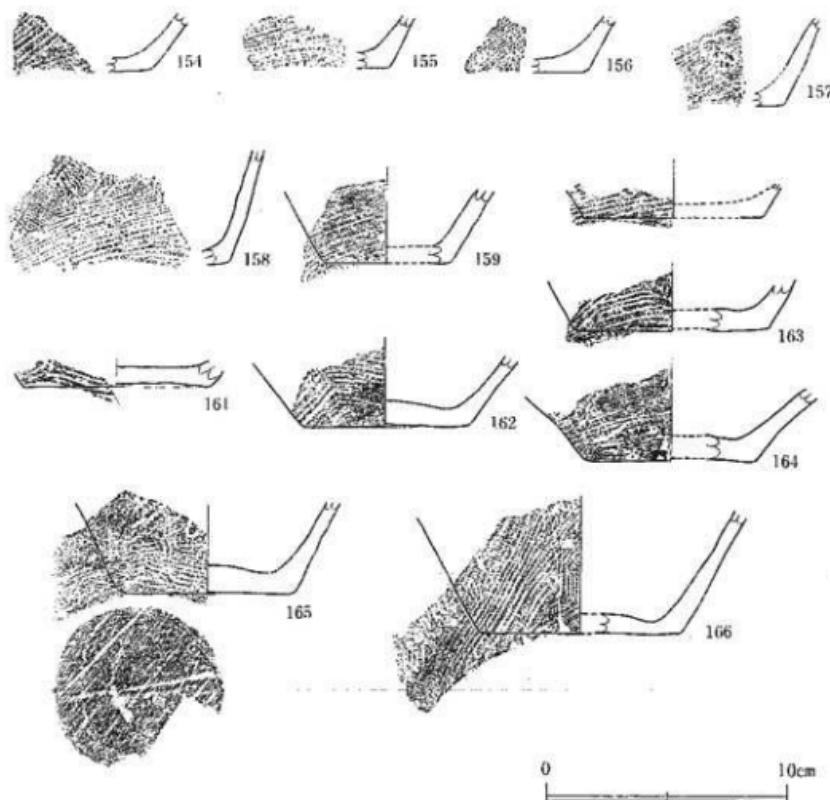


第1章 計算機與微處理器之基礎



第12図 漢文時代後継期の土器調査(12)

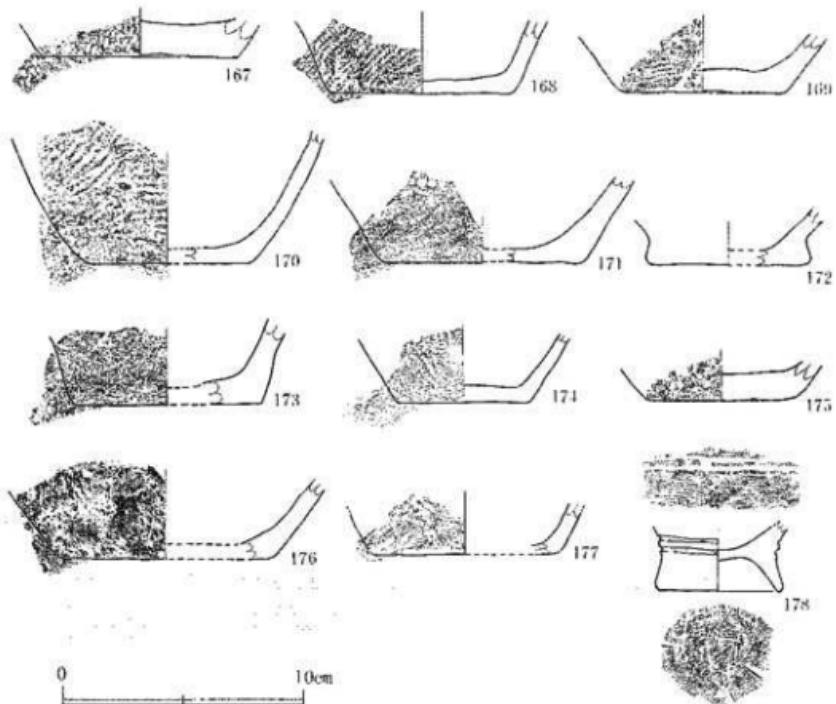
器物状況	断面	表	面	形制上の特徴	口径形状
145 KST 6 烧 D-型	口縁に内側へ凹むD字形断面。口縁は直線的で、底面をなす内側には斜面がある。外縁は直線的で、底面をなす外側には斜面がある。口縁部に鋸歯状の切欠きがある。	151	152	口縁部に鋸歬状の切欠きがある。底面は内側へ凹む。	口縁部に鋸歬状の切欠きがある。底面は内側へ凹む。
146 JKZ 6 烧 D-型	口縁部に鋸歬状の切欠きがある。底面は内側へ凹む。	153	154	口縁部に鋸歬状の切欠きがある。底面は内側へ凹む。	口縁部に鋸歬状の切欠きがある。底面は内側へ凹む。
147 LDH 6 烧 D-型	口縁部に鋸歬状の切欠きがある。底面は内側へ凹む。	155	156	口縁部に鋸歬状の切欠きがある。底面は内側へ凹む。	口縁部に鋸歬状の切欠きがある。底面は内側へ凹む。
148 LDH 6.5 烧? 体 底	口縁部に鋸歬状の切欠きがある。底面は内側へ凹む。	157	158	口縁部に鋸歬状の切欠きがある。底面は内側へ凹む。	口縁部に鋸歬状の切欠きがある。底面は内側へ凹む。
149 LSH 6.5 烧 体 底	口縁部に鋸歬状の切欠きがある。底面は内側へ凹む。	159	160	口縁部に鋸歬状の切欠きがある。底面は内側へ凹む。	口縁部に鋸歬状の切欠きがある。底面は内側へ凹む。
150 LHD 7 烧 体 底	口縁部に鋸歬状の切欠きがある。底面は内側へ凹む。	161	162	口縁部に鋸歬状の切欠きがある。底面は内側へ凹む。	口縁部に鋸歬状の切欠きがある。底面は内側へ凹む。
151 LHD 5.5 烧 体 底	口縁部に鋸歬状の切欠きがある。底面は内側へ凹む。	163	164	口縁部に鋸歬状の切欠きがある。底面は内側へ凹む。	口縁部に鋸歬状の切欠きがある。底面は内側へ凹む。
152 LHD 5.5 烧 口	口縁部に鋸歬状の切欠きがある。底面は内側へ凹む。				
153 不規 6.5 烧 口	口縁部に鋸歬状の切欠きがある。底面は内側へ凹む。				



第18図 縄文時代後続期の土器(13)

第13表 縄文時代後続期の土器観察表(13)

番号	出土場所	基形	断面	表面	内面	形制上の特徴	口縁部施紋
154	L.S51	7	壺	底	底部近くに斜面の底毛口調査を有す。	横筋のナガキ調査。	
155	L.M2	7	壺	底	底部近くに斜面の底毛口調査を有す。底面も底毛口調査の痕跡、ナガキ調査によって予想される付近に付いてる。	横筋のナガキ調査。	
156	L.R50	7	壺	底	底部近くに斜面の底毛口調査、底面も底毛口調査の後、ナガキ調査。	横筋のナガキ調査。	
157	L.R50	7	壺	底	底部の斜面の底毛口調査、横筋のナガキ調査。	ナガキ調査。	
158	L.N42	8	壺	少-壺	底部-底面にかけて斜面の底毛口調査を有す。底毛口調査は本部と底部近くでその方向を異なっている。底部はその他の部分と異なって底毛口調査が無く、絶対には底毛口調査の後、ナガキ調査。	横筋のナガキ調査。	
159	L.N48	6.5	壺	底	斜面の斜面の底毛口調査の後、ナガキ調査。底面はナガキ調査。	横筋のナガキ調査。	
160	L.T21	8	壺	底	底部近くに斜面の底毛口調査、底面はナガキ調査。	少筋しておらず、凹。	
161	L.N45	7	壺	底	底部近くに斜面の底毛口調査、底面はナガキ調査。	少筋。	底部中央がやや厚くなる。
162	L.N41	7.5	壺	底	底部近くに斜面の斜面の底毛口調査、底面はナガキ調査。	ナカないし、じきな斜面。	
163	L.R42	9	壺	底	底部近くに横筋の斜面の底毛口調査、底面はナガキ調査。	横筋のナガキ調査。	
164	L.P41	9	壺	底	底部-底面に横筋の斜面の底毛口調査、底面はナガキ調査。	横筋のナガキ調査。	
165	L.Q50	8	壺	少-壺	底部近くは斜面の斜面の底毛口調査、底面はナガキ調査。底面を数段に並べて形成しておられ、通常はその片側が残る。前の調査は底毛口調査を絶対近くに施し、その後にナガキ調査を加えている。	横筋のナガキ調査。	底部中央がやや厚くなる。
166	L.V49	8.5	壺	少-壺	表面には、足跡を複数箇所施す。底面近くでは斜面の斜面の底毛口調査、底面はナガキ調査。	横筋のナガキ調査。	



第19図 縄文時代後続期の土器(14)

第14表 縄文時代後続期の土器観察表(14)

番号	出土場所	器種	外観	内面	形制上の特徴	U骨部施設
167	LJ461	14	直	底部近くは出し側面を横に切削施設。底面はナメ調整。		
168	LK45	6	直	底面～底面にかけて直刃鉈を横位向軸彫文。底面のナメないし：ガキ調整。		
169	LN49	9	直	外側はナメないし：ガキ調整。	底面中央がやや厚くなる。	
170	LR50	7	直	外側は片葉刃を横位加軸施設し、底面近くはナメ調整。	底面のシカキ調整。	
171	KR45	8	直	外側には両刃（し：腰負回転？）を施し、底面近くはナメ調整される。	底面のナメ調整。	
172	LN45	75	直	横位のシカキ調整。横刃縁の通り出し部分は横刃で押さえて成形してなり。その正反側が残されている。	横刃のナメなし：ガキ調整。	
173	LN42	10	直	側位の直刃門面施設の後、横位のナメ調整。底面はナメ調整。	横位のナメ調整。	
174	LB42	6.5	直	底部近くには側位の直刃門面施設を施し、底面～底面にかけて直刃鉈を施す。底面近くでは鉈紋の回転方向は一定しない。	側位のシカキ調整。	
175	LN48	10.5	直	摩耗が著しく不明。	摩耗が著しく不明。	
176	KT42	4.5	直	摩耗が著しく不明。	摩耗が著しく不明。	
177	LN48	6	直	摩耗が著しいが側位の直刃門面施設が僅かに認められる。	横位のナメ調整。	
178	LN48	0.5	直	外縁との間に2条の平行施設を走らし、右側面部は横位の直刃門面施設の後、浅いシカキ調整。内面は横位のシカキ調整。	横位の直刃門面施設のナメなし：シカキ調整。	

## (2) 石器

前項(1)の土器に伴うと判断される石器には、石鎌、石錐、石匙、搔器、石籠、二次加工ある剥片、石核および磨製石斧、凹石がある。出土位置はほぼ、前項(1)の土器の出土位置と重なるが、帶郭北西斜面下の平坦面中央でも数点出土している。

石鎌(第20図1~4) 4点が出土している。有茎のもの2点、柳葉形のもの2点であり、いずれも黒色~灰白色の頁岩あるいは硬質頁岩を用いて製作されている。両面から丹念な押圧剥離を施して素材の加工をおこなうが、1, 3, 4では片面中央に素材剥片の主要剥離面の一部が残されている。

石錐(第20図5~11) 7点が出土している。黒色~灰色頁岩あるいは黄白色瑪瑙を用いて製作されている。1点は本体部分から錐部にかけて両面からの押圧剥離で丹念な整形をおこなって製作されているが、他の6点は継長あるいは一端の尖った剥片を素材として、錐部先端に片面のみの剥離を加えて製作されている。

石匙(第20図12・13、第21図14・15) 4点が出土している。縦型1点、横型2点および横型石匙の撮部分の破片1点である。灰~黒色の頁岩を使用し、撮部は両面から、刃となる部分はおもに片面からの加工を施している。

搔器(第21図16~19) 4点が出土している。黒褐色~暗灰色の頁岩あるいは白色瑪瑙の薄手の継長剥片を使用し、その側縁および端部に両面からの加工を施して刃部を作り上げている。

石籠(第21図20・21) 2点が出土している。灰白色~黄白色的頁岩製の肉厚な剥片を素材として用い、半としてその背面に加工を施して整形している。

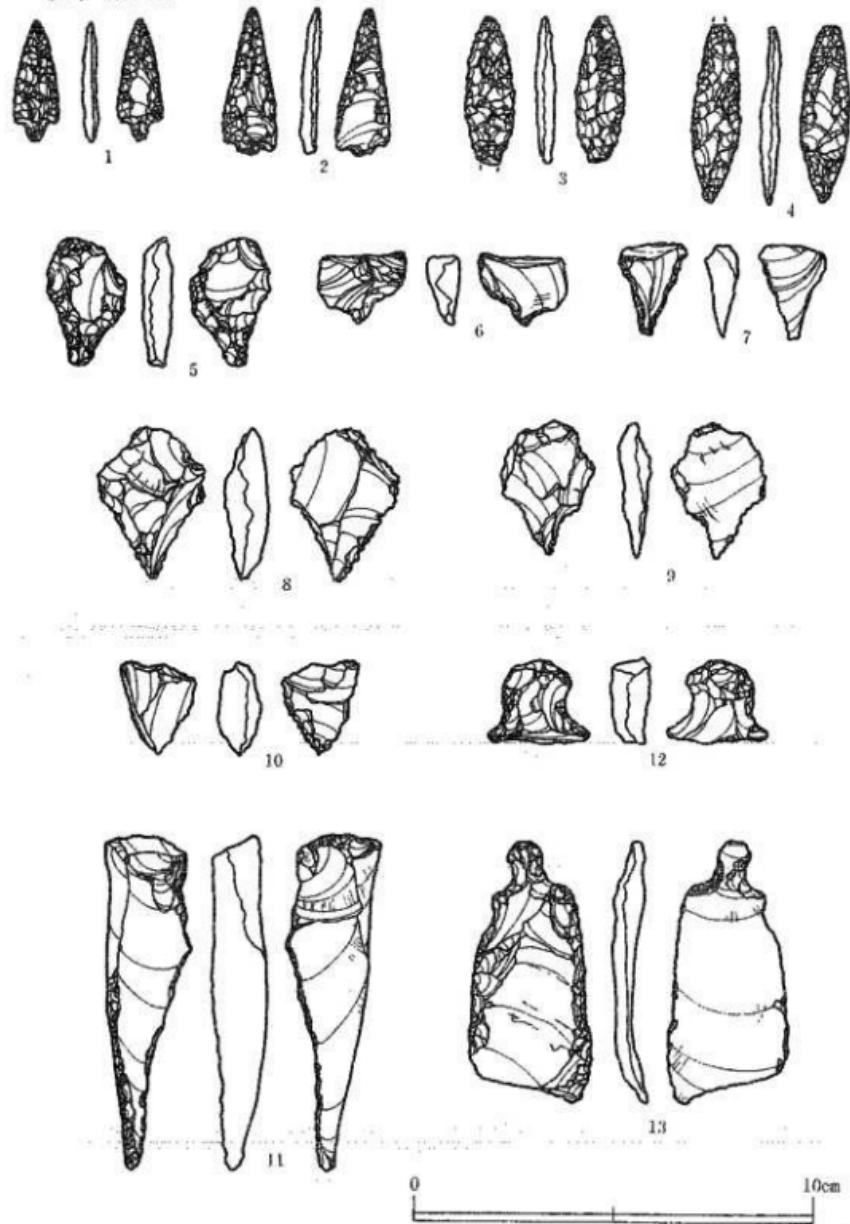
二次加工ある剥片(第22図22~第24図43) 灰白色~暗灰色の頁岩製剥片を素材とし、その一部に加工を施したり、素材の両面を粗い剥離で加工した石器22点が出土している。中には楔形石器とし得るような例や、両面加工石器からとられた大形の剥片も含まれている。

石核(第24図44~48) 5点が出土している。いずれも灰色~黒色の頁岩ないし珪質頁岩製の石核であり、小形の剥片が剥離されている。45~48は最終段階まで剥離された石核である。

磨製石斧(第25図49・50) 2点が出土している。49は硬質の緑色凝灰岩、50は蛇紋岩製である。いずれも器体中央部から基部を失った折損品である。49は使用による損耗と刃部再牛の結果、刃縁が直線的なものとなっている。

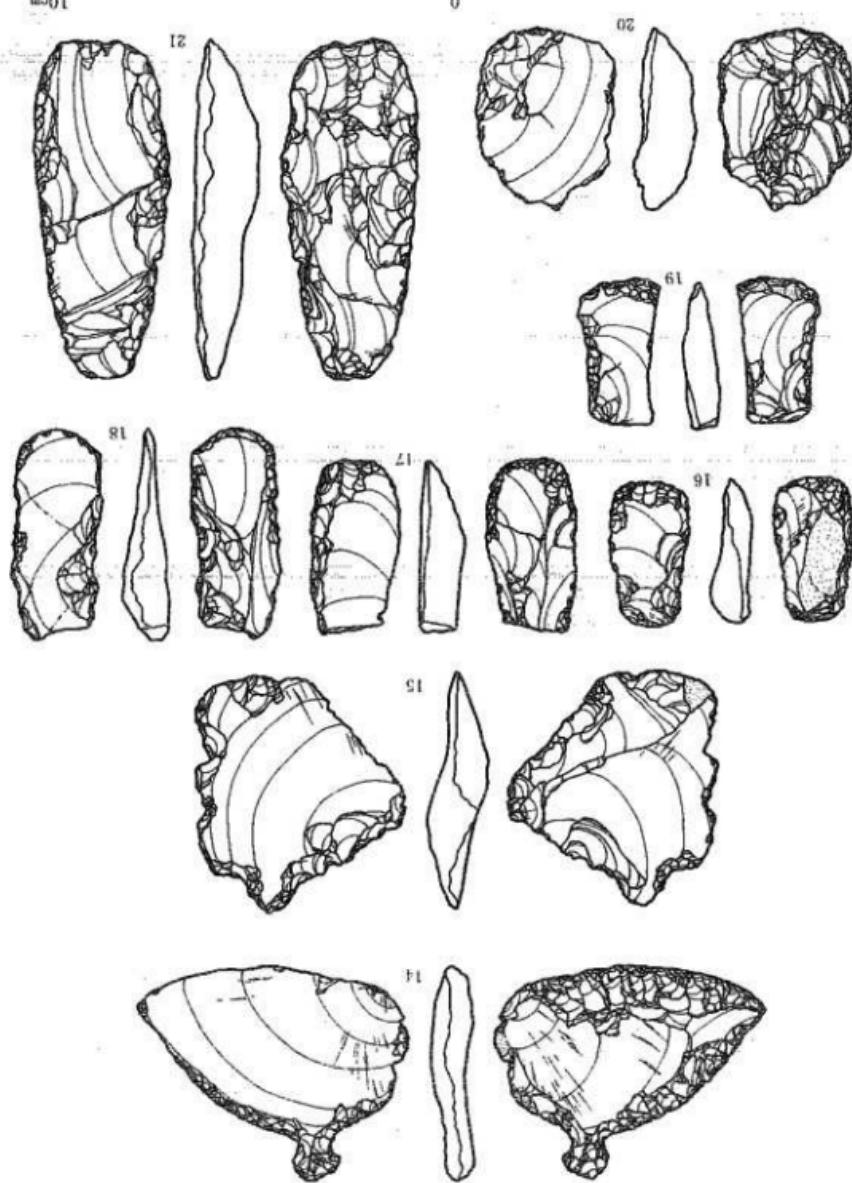
凹石(第25図51) 1点が確認された。泥岩製の偏平疊片面に3箇所の凹みが認められる。破断面近くの1箇所が最も深く抉れている。また、一侧縁に折損後の加撃痕を残し、さらに凹みのある面と反対側に被熱による煤状の炭化物の膠着が認められる。

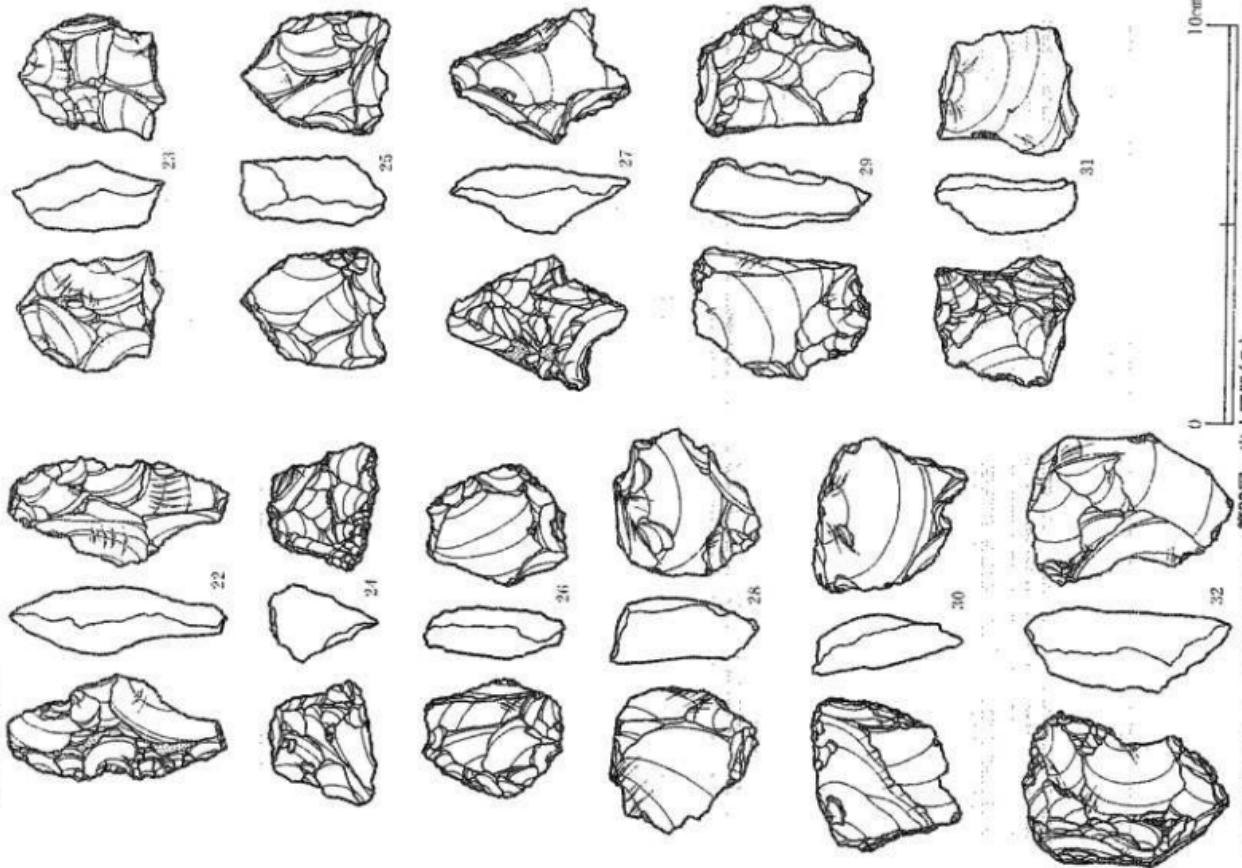
第4章 残存の記録



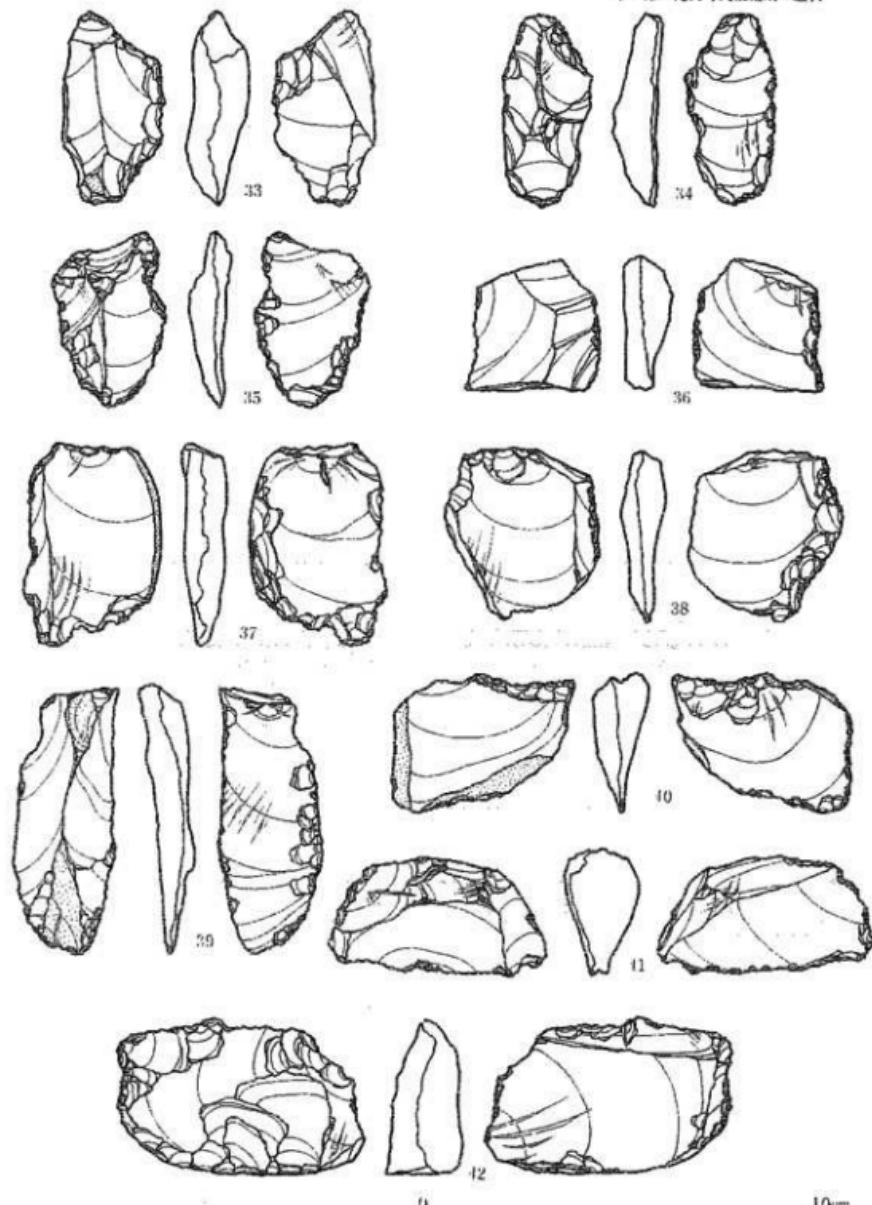
第20図 出土石器(1)

圖21 出土石器(2)

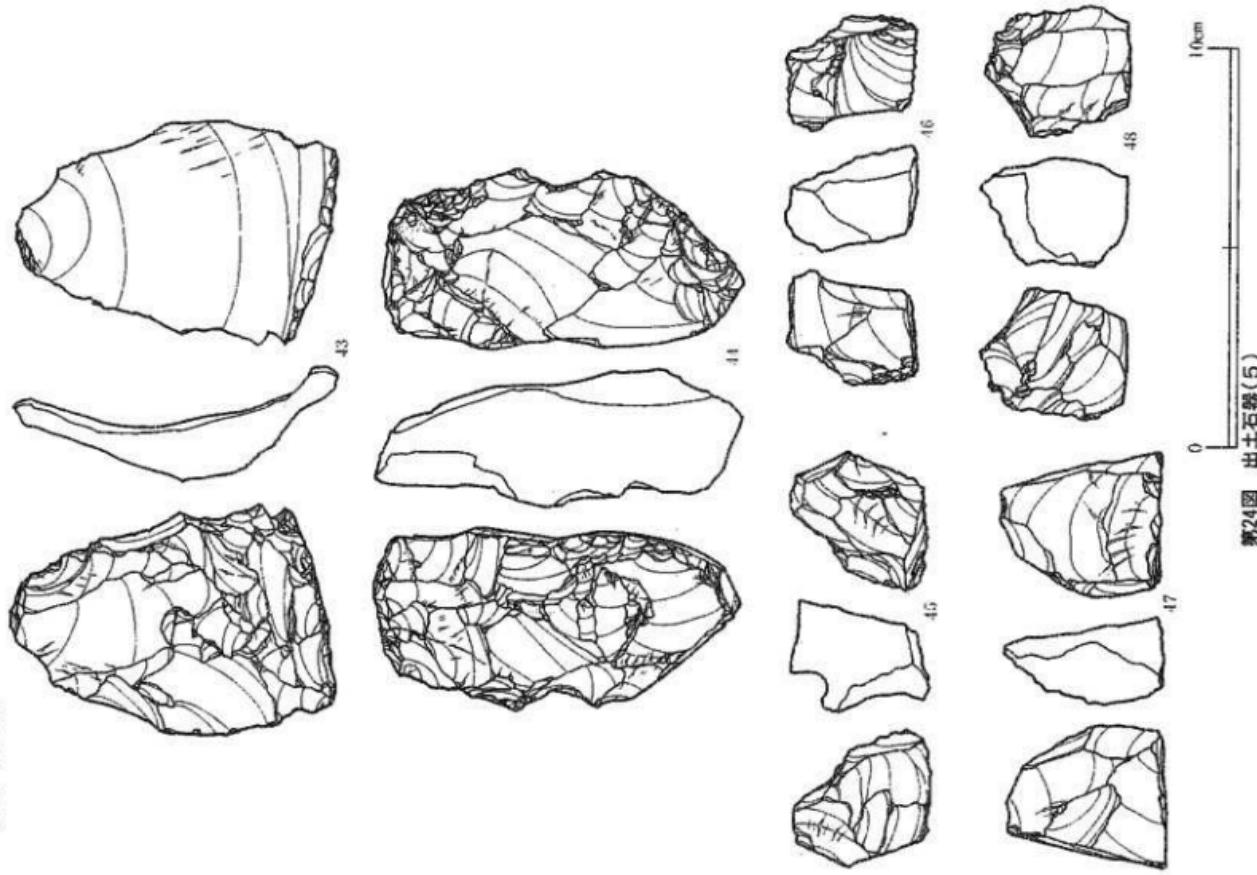




第22図 出土石器(3)



第23図 出土石器(4)

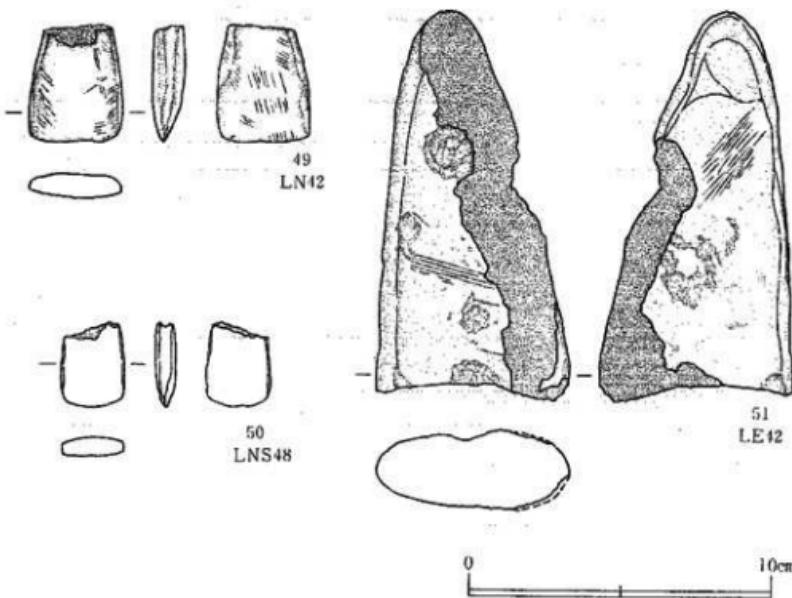


第15表 出土石器鍛磨表(1)

順序	アーティ	種 別	鍛 磨
1	LN42	石錐	灰白色調の石錐。一側(平面)に刃材の切削面を残す。
2	LN44	石錐	灰色質地。一側(半円になる方)に素朴な切削面を残す。表面欠損。
3	LN42	石錐	灰白色調。微細な磨耗跡。一側の先端に磨耗面を残す。
4	LN42	石錐	褐色調の石錐。表面欠損。
5	MB47	石錐	褐色調の石錐。打削面と削除面にかけて刃材の切削面を残す。表面欠損。
6	LS56	石錐	灰白色調の石錐。刃の一部(右下端部)を利用し、刃面磨耗と小さな切削面を作り出す。表面欠損。
7	I.R50	石錐	褐色調の石錐。打削面に鋸歯形を残す斜角先端部から刃はねを施して切削面を作り出した石錐。加工は表面側からうらに残される。
8	LO41	石錐	褐色調の石錐。表面磨耗と刃材の切削面を残す。表面側と軸側に交わる縁の表面側から表面にかけて二次加工を施して、打削面と削除面に交わる表面側を残す。
9	表錐	石錐	褐色調の石錐。木端右下端を折断し、打削面と軸側に交わる縁の表面側から表面にかけて二次加工を施して、打削面外側に三次加工を作り出した。
10	LP47	石錐	灰白色調の石錐。内側部分の先端部面に施した細かい切削面を施し、表面内に加工した。
11	LO42	石錐	褐色調の石錐。斜面・両側の刃端部の下端に削除面に施して刃材を作り出している。加工は表面側で内側から表面に向いて、右側面側で中央部を削除する方向に向いて、下端を削除から表面に向いて加えて加えている。
12	LD41	石錐	灰白色調の石錐。削除面の刃端部の端部。刃材の切削面が残り、その切削面を抉り込んで刃面を作り出している。
13	LS51	石錐	灰白色調の石錐。堅硬な岩。表面の直側面に削除面を残す。表面側は、横筋の状態についてては斜角削除面でもなされるものの、本体側面には削除面を残す。
14	MC49	石錐	褐色調の石錐。褐色調。細かい石粉混在にかけて刃材の切削面が残る。削除面及び上端は表面直側面の加工。下端は斜材の背面のうの留。斜材直側面に削除面。
15	LM42	石錐	黄褐色調の石錐。表面側削除面を複数箇所に施して加工し、その削除面に刃材を作り出され、削除面作り出しは左端・斜面とも、右端もしくは斜面から削除して作成してある。右端は表面側から斜面に向いて削除面を施している。
16	I.R51	表錐	褐色調の石錐。削除面を複数箇所の斜面の末尾部・斜面の端部に施して刃材を作り出している。削除面は右端から斜面に向いて、左端側面から削除して、右端は右端側面とともに加えて刃材を作り出している。斜材の直側面が削除されている。
17	LO42	錐器	灰白色調の石錐。一側を折断した時の他の部分に削除面・斜面から削除面を施して表面に加工している。
18	LO43	錐器	白色調の石錐。削除面の端部に加えて刃材を作り出している。下方の刃材は斜材の直側面から斜面に向けて削除面を作られており、斜材の直側面(斜材の直側面側面斜面)にもかかわらず削除面が施されている。斜材側面削除面の一方で斜材の中心部で折断したままの状態が残されている。
19	LE41	錐器	黒褐色の石錐。左端側面の斜面側面加工を施して斜面を作り出している。斜材側面削除面がそのままに残され、又、斜材の刃材側も残されている。
20	MD48	石錐	灰白色調の石錐。斜面の刃端部の下端を削除として、その斜面・斜面側の刃材を削除する。斜面側に加工して削除面。
21	LB40	石錐	灰白色調の石錐。内側の機械削除面を残すと、その斜面に斜材の刃材を施す。斜材側面削除面とともに斜材の斜面側面に施されるが、中央部では残していない。
22	LN42	二次加工削片	灰白色調。内部の斜材側面とともに粗大な切削面を残す。表面側斜面に斜材の刃材を削除面は大きく残されている。
23	LO49	二次加工削片	褐色調の石錐。斜面側の刃端部を削除して右端に加工した石錐。一部が刃材に削除面が付いている。
24	MA46	二次加工削片	褐色調の石錐。斜面側の刃端部を削除して右端に加工した石錐。斜材側面削除面による斜面側面が斜面側面に削除される。斜材側面。
25	I.Q49	二次加工削片	灰白色調。内部の斜材側面を削除して、斜面から斜材の刃材を削除する。斜面側面が斜面側面に削除されている。
26	LS53	二次加工削片	灰白色調。斜面側面を削除して斜材を削除し、その一端部が斜面・斜面側面の斜面側面を削除して刃材を作り出た。斜材の斜面側面は斜面側面の上に斜面側面をどける。
27	LN40	二次加工削片	灰白色調。内部斜材の下端の斜面側面に4箇、斜面側面に2箇削除面を施して刃材。斜材の刃材側面がそのまま残される。
28	LD41	二次加工削片	灰白色調。内部斜材の斜面側面を削除して、その斜面側面から斜材の刃材を削除して刃材を作りだした。斜材の刃材側面はそのまま残される。
29	I.E41	二次加工削片	灰白色調。内部斜材の斜面側面を削除して刃材。斜面側面が斜面側面を残す。
30	LS49	二次加工削片	灰白色調。内部斜材の斜面側面を削除して刃材。斜面側面から斜材の刃材を削除して刃材を作り出される。斜面側面が斜面側面を残す。
31	LN43	二次加工削片	灰褐色調の石錐。内部の斜材の下端を削除した石錐。光沢削除面に削除面が認められる。
32	LR49	二次加工削片	灰褐色調。内部斜材の斜面側面を削除して刃材。斜面側面が斜面側面を残す。斜面側面が斜面側面を残す。
33	LE41	二次加工削片	灰白色調の石錐。斜面側面を削除して二次加工削片が残される。斜面側面削除面が削除されている。
34	MB47	二次加工削片	灰白色調。内部の斜材側面の斜面側面を削除して刃材を作り出された石錐。
35	LP42	二次加工削片	灰白色調。比較的斜材の斜面側面を削除して刃材を削除して刃材。斜材の斜面側面削除面が斜面側面であるが、斜面側面の上部が斜面側面が削除されている。
36	LR49	二次加工削片	灰白色調。刃材を残す斜面側面の斜面側面から斜面側面に向かって削除した小刀側面を残す。刃材側面が削除されている。
37	RS43	二次加工削片	灰白色調。刃材を残す斜面側面の斜面側面から末端にかけて二次加工を施す。人が斜面側面から斜面側面にかけて、斜面側面を残す斜面側面に向いて、斜面側面が削除されている。
38	LP41	二次加工削片	灰白色調の石錐。斜面側面の斜面側面に向かって斜面側面を削除して削除している。斜面側面が削除されている。

第16表 出土石器観察表(2)

図面号	グリッド	種 別	概 帽
38	LD41	二次加工剝片	灰色頁岩。裏皮面を残した羅長形片の断面上細部加工を施した石器。加工は左側縁の断面上に施されるが、右側縁下面下端近くにも施されている。素材の打面を残す。
40	LM42	二次加工剝片	灰~褐灰色頁岩。末端に羅皮面を残す羅長形片の打面右縁の縁に背面、底面とともに加工を施す。背面側の加工は連続した剥離。
41	LR49	二次加工剝片	暗灰色頁岩。打面側を折り取った内側剝片の裏面側に細かな道筋剥離を加えた石器。
42	LN43	二次加工剝片	灰色頁岩。下端から左側縁にかけて裏皮面を残す剝片の打面側を折断し、その折断面に背面側からの細部加工を施している。
43	KS40	二次加工剝片	灰色頁岩。両面加工石器の剥離から剥離してとられた剝片。上下端には石核の裏面側が残される。背面に残された先行剝離面から剝片がとられた石核は円錐状のものと推定される。
44	MCA8	石核	灰色頁岩。剝片の剥離は石核の凹面から行われているが、ここに左側縁は両面からの剥向する剥離によって小形の剝片がとられている。
45	LD41	石核	黑色珪質頁岩。裏皮面残す。
46	LB42	石核	灰~褐灰色硅質頁岩。裏皮面残す。
47	LD41	石核	暗灰色頁岩。裏皮面残す。
48	MG49	石核	灰~白色硅質頁岩。裏皮面残す。



第25図 出土石器(6)

## 第2節 古代の遺物

### (1) 土器

#### 須恵器

器種は壺・甕である。

#### <壺> (第26図1・2)

1は体部から底部にかけての小破片であり、底部の切り離しは回転ヘラ切りである。

2も底部の破片であり、底辺に沿って高台がついている。底部の切り離しは回転ヘラ切りで高台周辺にナデが施されている。

#### <甕> (第26図3~12)

器形は判然としないが、中形あるいは大形の甕の胴部破片と推定される。

ここでは器の表面および内面にみとめられる器面調整痕によって分類した。

a：表面には横および斜め方向の平行直線状の叩き目、内面に斜めあるいは同心円状の当て具痕がみられる。3は胴部上位の破片であり、4・5・6は胴部中位の破片である。<sup>(見り)</sup>なお6の平行直線状叩き目には、直交する木目痕がみえる。

b：表面には斜め方向の平行直線状の叩き目、内面は刷毛目状の調整痕がみられる。7は胴部上位の破片である。

c：表面には斜め方向の平行直線状の叩き目を交差させており、内面は幾分凹凸がみられるが、ナデ調整されている。8は胴部上位の破片である。平行直線状叩き目には、直交する木目痕がみられる。

d：表面には斜め方向の平行直線状の叩き目が見られ、叩き目の方向をかえて綾杉状あるいは格子状にしている。内面はナデ調整されている。9・10は胴部中位の破片である。

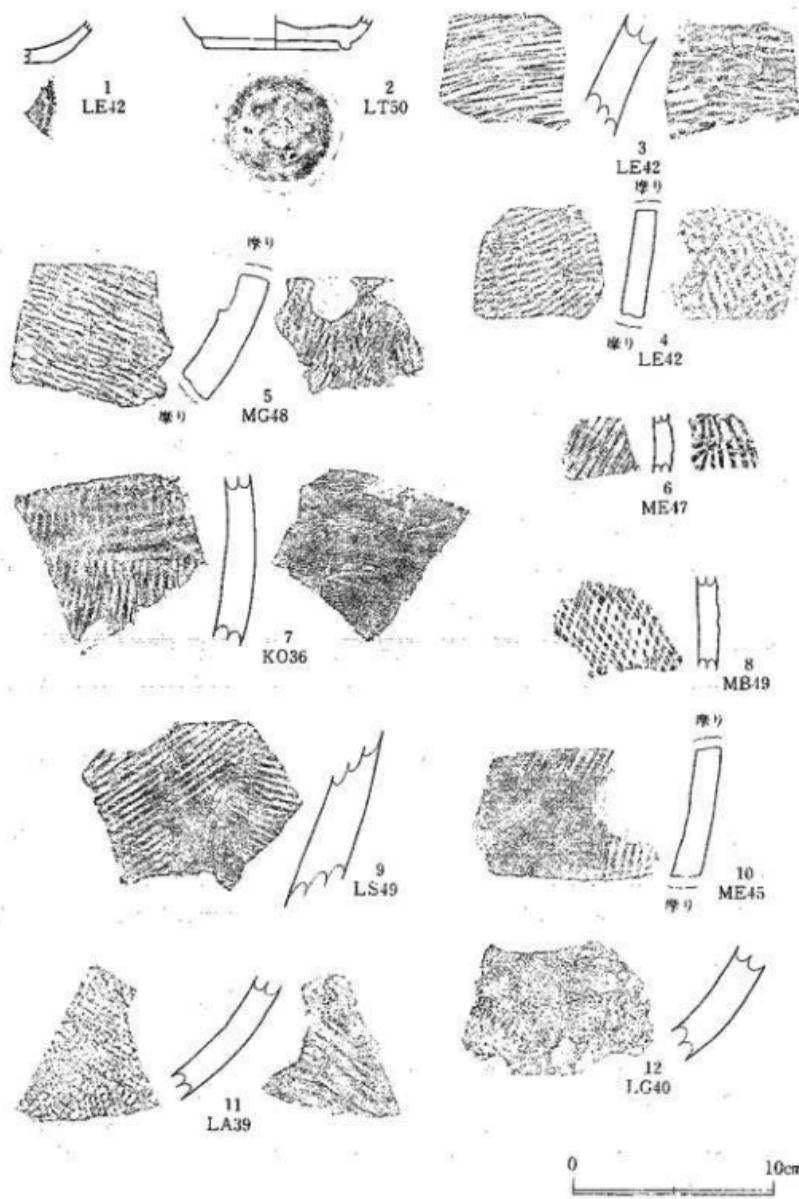
f：表面に細かい格子状の叩き目が、内面には同心円状の当て具痕がみられる。11は丸底を呈する底部の破片と思われる。

g：表面には細かい格子状の叩き目がみられるが、内面は指ナデ調整されている。12も丸底を呈する底部の破片とみられる。

以上須恵器壺及び甕については、8世紀後半から9世紀代の年代が推定される。<sup>(見り)</sup>

(註1) 4・5・10の断面がいずれも摩られており、破片を砥石に転用したと思われる。

(註2) 小松正夫『第18回古代城柵官衙遺跡検討会資料—秋田城跡とその周辺地域の土器様相』を参考にし、壺については体部がやや丸みをもつこと、高台にナデ調整がされていることから、8世紀後半の年代を想定した。甕類はいずれも胴部の一部であり、器面調整に際だった特徴がみられないことから壺の年代とはほぼ同時期と想定した。



第26図 古代の土器

### 第3節 中世の遺構と遺物

#### (1) 検出遺構

館の上館追跡第I郭北端の帶郭部分で、溝跡6条と、土坑1基を確認した。溝跡は北側からSD10、SD11、SD12、SD13、SD14、SD15とし、土坑についてはSK01の番号をふり当てた。

調査以前、この帶郭部分は館の上館第I郭から突きだした狹小な平坦部として見ていたが、調査の結果、上記の溝跡が第I郭外縁から順次内側に向かって作り替えられ、城館の廃絶とともに埋没した結果、狭い平坦面として残されたものであることが確認された。

重複する溝跡の関係は、SD10～SD14までは溝跡本体に切り合い関係が確認され、その顔に新しい。また、SD15については直接の切り合い関係はなかったものの、溝の構築を考慮すれば溝跡中で最も新しいものと判断された。また、溝跡の北側にはごく狭い平坦面があり、溝跡同様に郭面造成に伴って形成されたことが推測されたが、上面での遺構確認はなかった。

#### SD10

帶郭上面の最も外側を巡る。基底面での幅1.3m、確認面からの深さ0.65mを測る。南側に沿ってSD11が重複しており上面幅は不明であるが、基底面から僅かに残る立ち上がりの延長で復元すればおそらく3m前後の幅はあったであろう。断面形は偏平な逆台形を呈する。溝跡の東側延長は帶郭の付け根に沿って彎曲するが、一部屈曲する部分もある。また、調査区の東端近くではSD14から屈曲して斜面へ向かう溝跡によって切られている。西側延長はSK01のさらに西側の段状に巡る平坦面へと連続する。

#### SD11

SD10に重複してその南側を巡る。基底面での幅0.9m、確認面からの深さ0.6mを測る。南側の縁をSD12によって切られているが、基底面の立ち上がりから上面幅は2.5m前後に復元される。断面形はSD10同様、偏平な逆台形を呈する。SD11はSD10にほぼ沿うように巡り、溝の掘り方の大半はSD10の覆土内につくられている。東側延長はSD10の掘り方をほぼそのまま利用している。

#### SD12

SD11の南側を巡る溝跡。西側のはほとんどがSD13に切られており、東側部分のみの確認である。基底面での幅1.1m、確認面からの深さ0.6m、上面幅1.6mを測る。断面形は逆台形を呈するが、西側に向かうに従いSD10、SD11同様、偏平な逆台形に移行する。

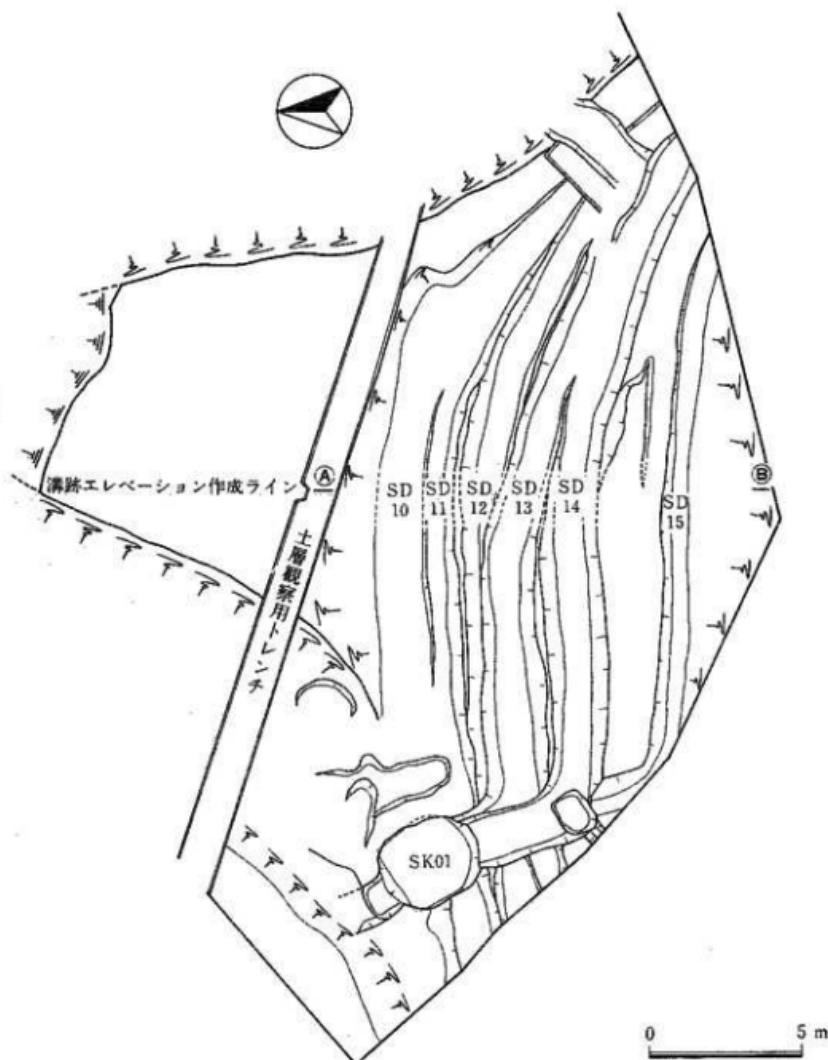
#### SD13

SD12の南側を巡る溝跡。西側ではSD12の掘り方をそのまま使ってつくられており、また東端部はSD14にその大半を切られている。基底面での幅0.94m、確認面からの深さ1.06m、南側にSD14が重なるが、基底面からの立ち上がりで復元できる上面幅は2.1m前後と推定される。断面形は逆台形を呈する。溝の延長西端は屈曲して斜面へ向い、さらにそれを越えて段状の平

垣面へも続いている。

SD14

SD13の南側を巡る溝跡。重複し合う溝跡5条のうちでは最も南側を巡る。基底面での幅0.9m、



第27図 帯郭上面全体図

H:22,600m

## 平面上部黄土層柱記

SD10 1 10YR5/8黄褐色 砂 土質は硬いが弱い。微細な植物根が多く、10YR6/6明黄色の砂質土と全体に混じりあって、2.5Y5/6黄褐色の砂質土。

の部分で砂質土と小さな隙間で層している。

2 10YR5/6黄褐色 砂 土質は堅くしまっている。小さな粘土塊が全体に混じっている。

3 10YR5/6黄褐色 砂 SD10の1とは同じ。土質がどちらかで青味が強い。

SD11 1 10YR5/6黄褐色 砂 土質はやわらかく良い。植物根が多い。

2 10YR5/6黄褐色 砂 土質は軟質で植物根が多い。10YR6/6明黄色の砂質土と混じっている。

3 10YR5/6黄褐色 砂 土質は軟質で植物根が多く含まれる。粘土質が多く成りしている。

4 10YR5/6黄褐色 砂 土質は硬いが弱い。植物根が多い。

5 10YR5/6黄褐色 シルト 土質は軟質、10YR5/6明黄色の砂質土が少し混じっている。

6 10YR5/6黄褐色 砂 土質は4SD10の1とは同じで、かすかに黄褐色の砂質土。

7 10YR5/6黄褐色 砂 土質は軟質、徐々に粘土質が多く混入している。2.5Y4/6リーブ褐色の砂と後状で多く混じるためにSD11の6よりもさらに青味が強い。

8 10YR5/6黄褐色 砂 土質は4SD10の1とは同じで、10YR4/6リーブ褐色の砂より粘土質の方に向流入率が高い。無分離みかかっている。植物根が少し見られる。

9 2.5Y4/6オリーブ褐色 砂 土質は軟質、10YR5/6明黄色の砂質土の粒が全体にちらり、10YR6/6明黄色の細い砂質土も少し混じっている。

10 10YR5/6黄褐色 砂 土質は硬質。表面は堅くしまっている。

11 10YR5/6黄褐色 砂 土質は軟質、10YR5/6明黄色の砂質土が全体に細かくかられていて、10YR6/6明黄色の砂質土が多少混じっている。

SD12 1 10YR5/6黄褐色 砂 土質は硬質。表面は堅くしまっている。

2 10YR5/6黄褐色 砂 土質は軟質。10YR5/6明黄色の砂質土が全体に細かくかられていて、10YR5/6明黄色の砂質土が層状で混じっている。

3 10YR5/6黄褐色 砂 土質は硬質。7.5Y5/8明黄色の砂質土が全体に大変にちらばいでいる。10YR4/6オリーブ褐色の砂質土が層で少層入している。

4 10YR5/6黄褐色 砂 土質は軟質。表面は堅くしまっている。10YR5/6明黄色の砂質土と10YR5/6明黄色の砂質土が層状に混じっている。

5 10YR5/6黄褐色 シルト 土質は軟質。植物根はほとんど見られない。

SD13 1 10YR5/6黄褐色 砂 土質はやわらかい。砂の部分はSD10の1とほとんど同じ。

2 10YR5/6黄褐色 シルト 土質はやわらかい。層の部分ではSD10の1とほとんど同じ。

3 10YR5/6黄褐色 砂 土質は軟質。11.5/10褐色の砂質土が多少含まれていて、10YR5/6明黄色の砂質土が多く、2.5Y

4/6オリーブ褐色の砂質土と混じり合っている。

4 10YR5/6黄褐色 砂 土質は軟質。2.5Y5/8リーブ褐色の砂質土が入り混じっている。

5 10YR5/6黄褐色 砂 植物根の多くは土質とやわらかい。10YR5/6明黄色の砂質土とが小さな隙間でまばらに數らばり、7.5Y5/8

の砂質土と2.5Y4/6の砂質土とが入り混じっている。7.5Y5/8の砂質土も小さい砂の塊で若干存在する。

6 10YR5/6黄褐色 砂 土質は4SD10の1とはどんと同じだが、わずかに2.5Y5/6の砂質土の粒の層合が大きい。11.5/10の小さな

粒も見られる。植物根が多い。

7 10YR4/8褐色 砂 土質は4SD10の1とほとんど同じだが、7.5Y5/8の砂質土の占める割合がわずかに大きい。3.5Y4/6の砂質土が大きな塊で混じている。植物根多。

8 10YR4/8褐色 砂 土質は4SD10の1とほとんど同じだが、7.5Y5/8の砂質土の占める割合が微少さ。白色帶の貝化石が全体にちらばっている。

9 10YR4/8褐色 砂 土質は4SD10の1とほとんど同じ。10YR5/6明黄色のシルトが層じいでいる。SD13の8より青味の強い土色である。植物根多い。

10 10YR5/6黄褐色 シルト 土質はよく見えている。10YR5/6明黄色のシルトの粒が見られる。

11 10YR4/8褐色 砂 土質はやわらかく、層状な植物根がある。SD10の8とはほぼ同じ土色。

SD14 1 10YR4/8褐色 砂 ハーキマイト質。軟質で弱い。植物根の多い黃土。

2 10YR5/6明黄色 砂質土と比較的よく見える。白色帶の運搬体が多く混じる。植物の混入は1層に比べ少ない。

3 10YR5/6明黄色 砂質土と比較的よく見える。白色帶の運搬体多く混じる。

4 10YR4/8褐色 砂 ハーキマイト質と比較的よく見える。砂質土をベースとして暗褐色の粘土ブロックを混入する。

5 10YR5/6黄褐色 砂質土。軟質で弱い。上層の上に多くの砂質土と細かい砂を分ける層理構造が見て取れる。

6 10YR5/6黄褐色 砂 軟質で弱い。砂質土と細かい砂を混じて、下層に褐色粘土ブロックを混入。

7 10YR5/6褐色 砂 軟質で弱い。砂質土と細かい砂を混じて、下層に褐色粘土ブロックを混入。

8 10YR5/6褐色 砂 軟質で弱い。砂質土と細かい砂を混じて、下層に褐色粘土ブロックを混入。

9 10YR5/6褐色 砂 軟質で弱い。砂質土と細かい砂を混じて、下層に褐色粘土ブロックを混入。

10 10YR5/6褐色 砂質土。軟質。粘土ブロックが半端な上層に。黒褐色シルト上層に少層産出。

11 10YR5/6明黄色 砂 ハーキマイト質。よく見える。白色帶。砂ブロックを含む。

12 10YR4/8褐色 砂質土。軟質が細かくかられて、主張土と粘土ブロックの層入はほとんどない。軟質。

13 10YR5/6褐色 砂 ハーキマイト質。比較的よく見える。白色帶。砂ブロックと、暗褐色シルト、青味がかった土色がほぼ等厚づつ現る。

14 10YR5/6褐色 砂 軟質が細かくかられて、主張土と粘土ブロックの層入はほとんどない。白色帶。

15 10YR5/6褐色 砂 軟質で弱い。砂質土と細かい砂を混じて、下層に褐色粘土ブロックが半端な上層に。

16 10YR5/6褐色 砂 軟質で弱い。砂質土と細かい砂を混じて、下層に褐色粘土ブロックを含む。

17 10YR5/6褐色 砂 軟質で弱い。砂質土と細かい砂を混じて、下層に褐色粘土ブロックを含む。

18 10YR5/6褐色 砂 軟質で弱い。砂質土と細かい砂を混じて、下層に褐色粘土ブロックを含む。

19 10YR5/6褐色 砂 軟質で弱い。砂質土と細かい砂を混じて、下層に褐色粘土ブロックを含む。

20 10YR5/6褐色 砂 軟質で弱い。砂質土と細かい砂を混じて、下層に褐色粘土ブロックを含む。

SD15 1 10YR4/8褐色 砂 ハーキマイト質。軟質で弱い。植物根多い。

2 10YR5/6明黄色 砂 ハーキマイト質。比較的よく見える。白色帶。

3 10YR5/6明黄色 砂 ハーキマイト質。比較的よく見える。白色帶。

4 10YR5/6褐色 砂 軟質で弱い。砂質土と細かい砂を混じて、下層に褐色粘土ブロックを含む。

5 10YR5/6褐色 砂 軟質で弱い。砂質土と細かい砂を混じて、下層に褐色粘土ブロックを含む。

6 10YR5/6褐色 砂 軟質で弱い。砂質土と細かい砂を混じて、下層に褐色粘土ブロックを含む。

7 10YR5/6褐色 砂 軟質で弱い。砂質土と細かい砂を混じて、下層に褐色粘土ブロックを含む。

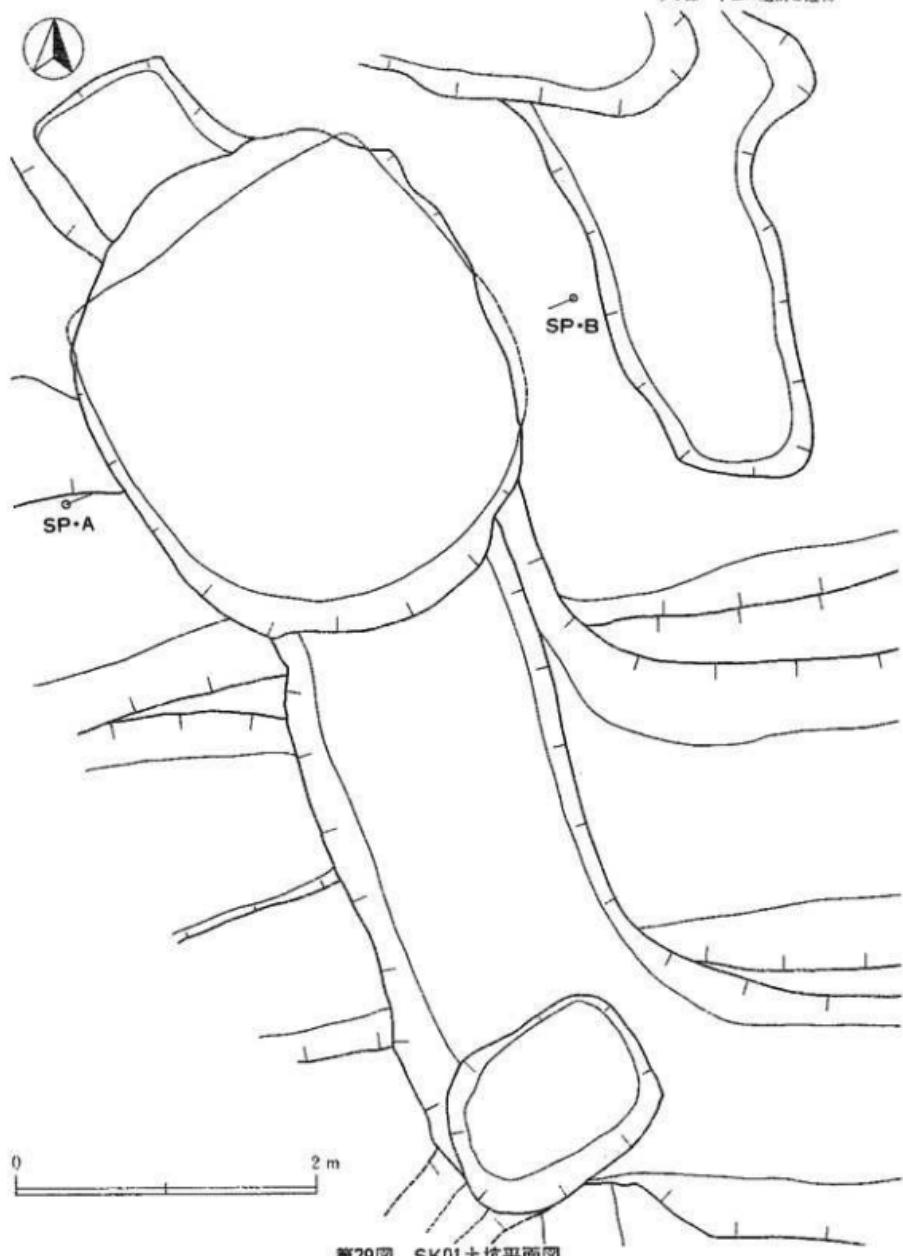
8 10YR5/6褐色 砂 軟質で弱い。砂質土と細かい砂を混じて、下層に褐色粘土ブロックを含む。

9 10YR5/6褐色 砂 軟質で弱い。砂質土と細かい砂を混じて、下層に褐色粘土ブロックを含む。

10 10YR5/6褐色 砂 軟質で弱い。砂質土と細かい砂を混じて、下層に褐色粘土ブロックを含む。

11 10YR5/6褐色 砂 比較的よく見える。白色帶。

第28図 莓ヶ上面清跡土層断面図



第29図 SK01土坑平面図

確認面からの深さ0.96m、上面幅2.4mを測る。断面形はSD13とほぼ同様の逆台形を呈する。SD14西端はSD13同様、屈曲して斜面へ向かっており、さらに西側の段状の平坦面へも続いている。また、東端でも屈曲して斜面へ向かう部分が確認された。西端の屈曲部は帶郭西肩部分に位置するSK01と重なるが、後述するようにSK01は本來地下式坑であったと考えられ、その直接の重複関係は確認できなかった。

## SD15

SD14の南側を巡る溝跡。西端はSD14の西端屈曲部に連結しており、それより先はSD14の掘り方に重なる。SD14の連結部溝底には $1.4 \times 1.1$ m、深さ0.2mの土坑状の掘り込みがある。SD15の南側は現在残る第Ⅰ郭からの急崖に連続する。

## SK01（第29図、第30図）

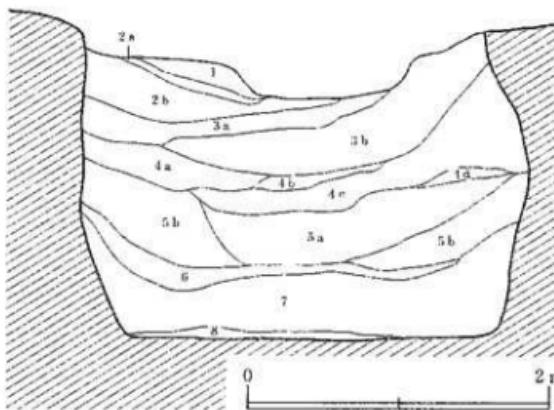
帶郭上面西肩部分、SD14の屈曲部分に重なる位置にある。斜面に向いた側に幅1m、長さ0.7m、深さ0.15mの入口が付き、入口側の壁および両側壁が直線、奥壁は円弧となつてまる。

SP・A

H:21,000m

SP・B

H:21,000m



## SK01 土層柱記

- 1 10YR5/6 黄褐色 砂質土 地山変化物質なしの砂質土をベースとする浅色～褐色色が確認に見える。
- 2 a 10YR4/6 黄褐色 砂質土 地の裏人土が少なく、比較的均質。
- 2 b 10YH4/6 黄褐色 砂質土 地山変化物質なしの黄褐色地盤上に確認する。よし地山下プロックの約0-70cmほど。
- 3 a 10YH4/4-4/6 黄褐色 砂質土 ごく少量オーラーブ色の砂質土プロックが混じる。地山プロックの大形のもの約50mm程度が確認に多い。
- 3 b 10YR5/6 黄褐色 砂質土 地山變化物質からなる。下部で褐色の砂質土が輪状構造を見る。
- 4 a 10YR3/6 黄褐色 砂質土 地山変化物質なしの砂質土をベースとする、比較的均質。
- 4 b 10YR3/4 黄褐色 シルト 1個粒を含む。地山変化物質を含むオーラーブ色の砂質土がプロック状に混じる。
- 4 c 10YR3/6 黄褐色 砂質土 地山下(変化物質)をベースとする。
- 4 d 10YR4/6 黄褐色 砂質土 プロック状に地山変化物質で埋まっている。
- 5 a 10YR5/6 黄褐色 砂質土 地山上に含まれる変化物質を含む中に暗褐色土が挟状に混じる。
- 5 b 10YR6/8 明黄色 黄褐色 砂質土 地山上に含まれる泥炭化物質はなく均質。
- 6 10YR5/6-4/6 黄褐色～白色 砂質土 上層および下層に比較しやや暗い色調。
- 7 10YR5/6 黄褐色 砂質土 地山よりの削除で地山下に含まれる泥炭化物質が多い、厚さでは少ない。
- 8 10YR3/4 黄褐色 土シルト ウツク松原 崩壊時の流入土がある。

第30図 SK01 土坑断面図

両側壁間は2.6m、入口側の壁と最奥部との間は2.7m、確認面からの深さ2mを測り、入口部分との間には0.25mの差がある。造構内の埋土は褐色～黄褐色の砂質土によって古められたり、基本的に地山土の崩落土である。造構外からの流入土は極端に少なく、最下層に薄層をなす暗褐色土と埋没中に砂質土プロックを巻き込んで流入した暗褐色土に限られる。このことから、本遺構は本来その上部が開口していたものではなく、天井部をもった掘り抜き式の地下式坑であったと判断される。溝跡との関係では、少なくとも本土坑の埋没後にSD14が構築されたような痕跡は確認

されず、おそらく両者は極めて近い時期に営まれていたものであろうと推測される。

## (2) 土器・陶磁器

### 須恵器系陶器

壺・甕・擂鉢・鉢があり、器形および器面の調整痕の観察から第2節に掲げた須恵器とは別に分類した。

#### <壺・甕> (第31図1~9)

1の壺をのぞいた他は、破片であるため壺か甕かの器形の判断ができない。

1は器面に轆轤水挽き痕が残り、特に内面において線状痕として顕著に残っている。器面の厚さは上下で5mm前後の差がある。

そのほかの破片については、器の表面と内面にみとめられる調整痕で分類した。

a：表面および内面に轆轤水挽き痕だけがみられる。2・3は胴部下半の破片である。

b：表面には横方向の平行直線状の叩き目、内面には円形に凹む当て具痕がみられる。4は胴部上半の破片である。

c：表面の調整はナデだけであり、内面には円形に凹む当て具痕がみられる。5は胴部中位の破片と思われる。

d：表面には斜め方向の平行直線状の叩き目が施されている。内面は幾分凹んでいるが、ナデ調整されている。6・7は胴部下半の破片である。

e：表面には横方向に平行直線状の叩き目がみられるが、内面は平滑にミガキ調整されている。

8は平底の底部破片であり、底面もミガキ調整されている。9も底部破片であり、切り離しは静止糸切りである。表面は轆轤調整痕がのこり、内面はすられ平滑である。

#### <擂鉢> (第32図1~7、第33図8~14)

口縁部と体部、底部の破片である。

いずれも器表面は轆轤水挽きで調整され、内面には櫛状の工具でひかれた卸し目がみられる。

1~7は口唇内側が斜めに面取りされており、そこに櫛目波状文が施されている。その口唇部の下は3cm前後の隙間をあけて、卸し目がすきまなく引かれている。卸し目の幅は2~3cmである。

8~13は体部破片である。8は一条の幅が3cmで卸し目の間隔があいているが、他の9~13は交差して詰まっている。12・13は底辺部に近く、使用によって内面が平滑にすられている。<sup>(図1)</sup>

14は底部破片であり、底部の切り離しは静止糸切りで、内面は使用によって平滑にすられている。

#### <鉢> (第33図15)

内外面に轆轤水挽きの痕跡がみられる。内側に卸し目はない。15は体部破片である。

以上の須恵器系陶器の壺・甕・擂鉢・鉢は珠洲焼きの年代と対応させて15世紀後半頃と推定される。<sup>(註4)</sup>

#### 瓦質土器

〈手あぶり〉(第33図16)

褐色を呈する素焼きの土器で口縁部の破片である。口唇部には蓮弁状の、口頸部には算木状の帯がめぐる。

瓦質土器の年代は中世城館の出土例と対応させて16・17世紀頃と推定される。<sup>(註5)</sup>

#### 輸入陶磁器

〈碗〉(第34図1~5)

いずれも中国産の青磁破片であり、灰色の素地に薄く釉薬がかかる。それぞれの釉薬の色は1と5が苔色、2・3・4が山葵色を呈している。

1は体部の破片であり、2~5は高台のついた底部破片である。1の表面には蓮弁文がみられる。5の内側見込みに文様が見られるが、形状は判然としない。なお高台は垂直に立ち上がり内側を削っている。高台の内側には釉薬が施されていない。

〈皿〉(第34図6)

中国産の青磁であるが、灰かぶりにより透明度の高い発色をしていない。高台がやや内側に入りこんでおり、内面体部上位には筋状の織文がみられる。

〈酒海壺〉(第34図7)

中国産の青磁であり、灰色の素地に1.5mmの厚さで淡水色を呈する釉薬がかかり、貫入がみえる。蓋と身からなる酒海壺の身のほうであり、広口壺の口縁部と体部の破片であるとみられる。口縁部は上縁を平にさらに内外側から面取りしている。底部は欠損しているが、二重高台となっている。なお体部には縦方向に織文がはいる。

以上の碗・皿は中国明代の15世紀に製作年代が推定され、酒海壺について14世紀の製作年代が推定される。<sup>(註6)</sup>

#### 施釉陶器

〈小皿〉(第34図8・9)

素地は灰色で口唇部内側に薄緑色の釉薬がかかっている。口縁部が短く斜めに外傾し、口縁端部が外反する端反皿である。9は底部に回転糸切りによる切り離しの痕跡が残る。

〈卸し皿〉(第34図10)

素地は灰色で口縁部内外に苔色の釉薬がかかっている。内側底面に卸し目がみられる。卸し目は一定の幅をもつ櫛状のものを引いたのちに、棒状のものを引いて交差させたものである。底部の切り離しは回転糸切りである。

#### <茶碗>（第34図12）

素地は灰色で、漆黒の釉薬が内面全体に、外面部上位にかかっている。

他に第34図11は内外面に黄褐色の釉薬がかかるが、器種が不明のものである。

以上的小皿・卸し皿・茶碗破片の産地は瀬戸で、15世紀代の年代が推定される。

### （3）銭貨

#### <銭貨>（第35図10・11）

10は篆書体で宣和通寶と判読できる。量目は2.47 gである。

11は篆書体で皇宋通寶と判読できる。量目は2.81 gである。

## 第4節 近世の遺物

### （1）陶磁器

#### 施釉陶器

##### <鉢>（第34図13）

内外共に灰褐色の釉薬がかかっているが、内面は白い釉薬による波状の流しがけがみられる。

鉢の産地は唐津で18世紀代の年代が推定される。<sup>（出）</sup>

#### 染付磁器

白磁の素地に藍色で文様を付したもので、茶碗・皿・鉢に大別できる。

#### <茶碗>（第35図1～5）

1～3は口縁部の破片であり、4・5は体部および底部の破片である。文様は1・2の網目のものと、4・5の植物・山水にわかれれる。

#### <丸皿>（第35図6・7）

7は口径に比して小さい高台がつく。文様は内面の口縁部に線描だけである。

また内側見込みに蛇の目剥ぎの痕跡がのこっている。6は高台が大きく、内面には山水文がえがかれている。

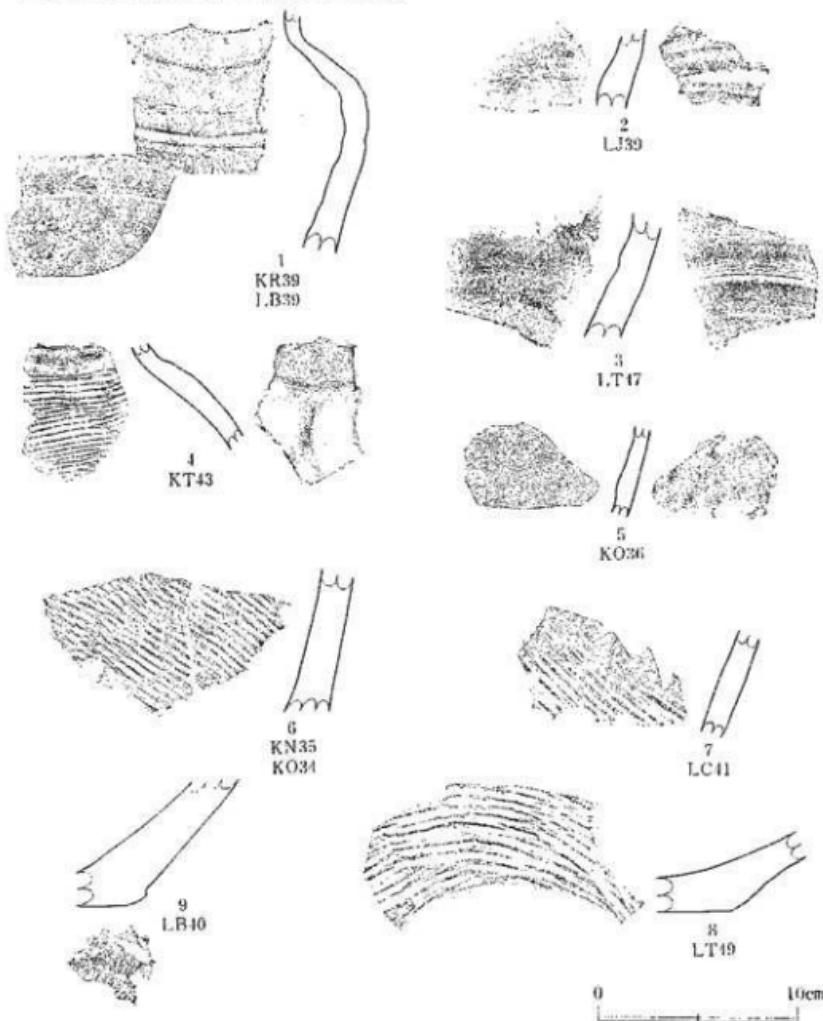
#### <鉢>（第35図8・9）

8は口縁部の破片であり、口唇の内側に帯状の文様帶がある。9は底部破片であり、内側に線文様がわずかにみえる。

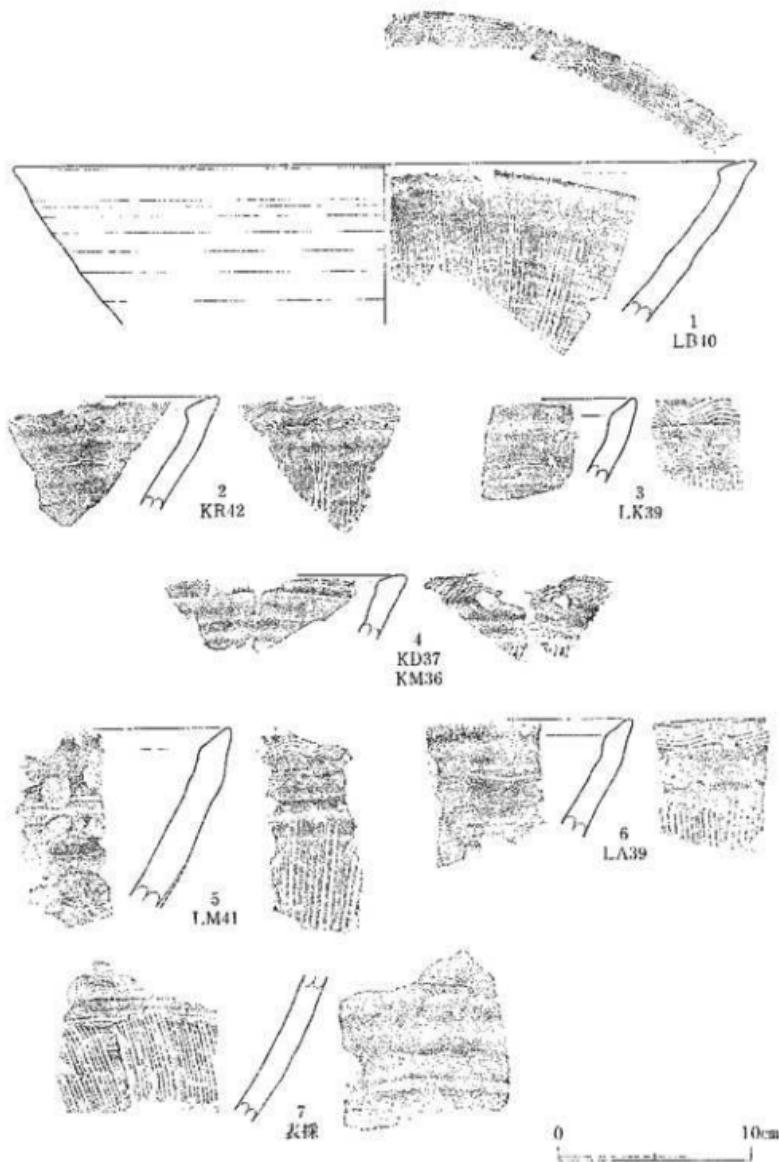
丸皿の產地は伊万里で、17世紀中頃の年代が推定される。その他の磁器の產地は不明であり、年代は18世紀以降と推定される。

## (2) 銭貨

第35図12は文久永寶で、量目は2.86 gである。

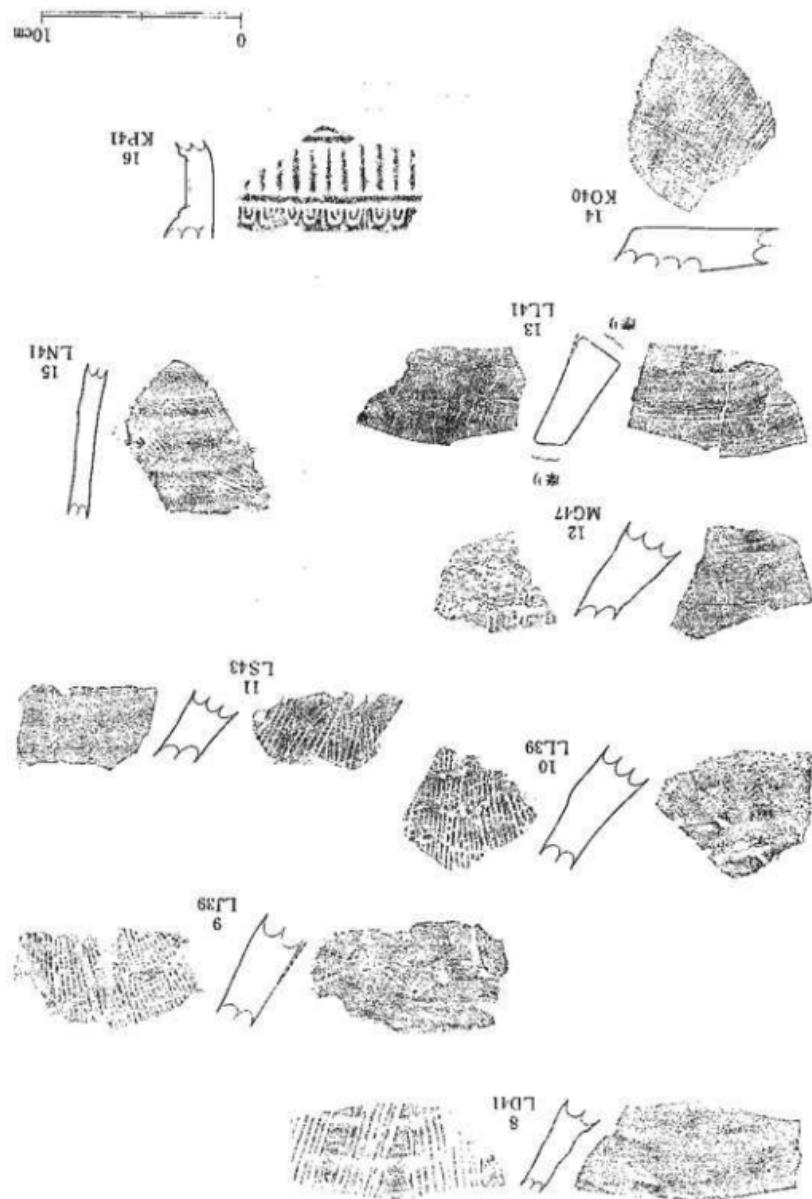


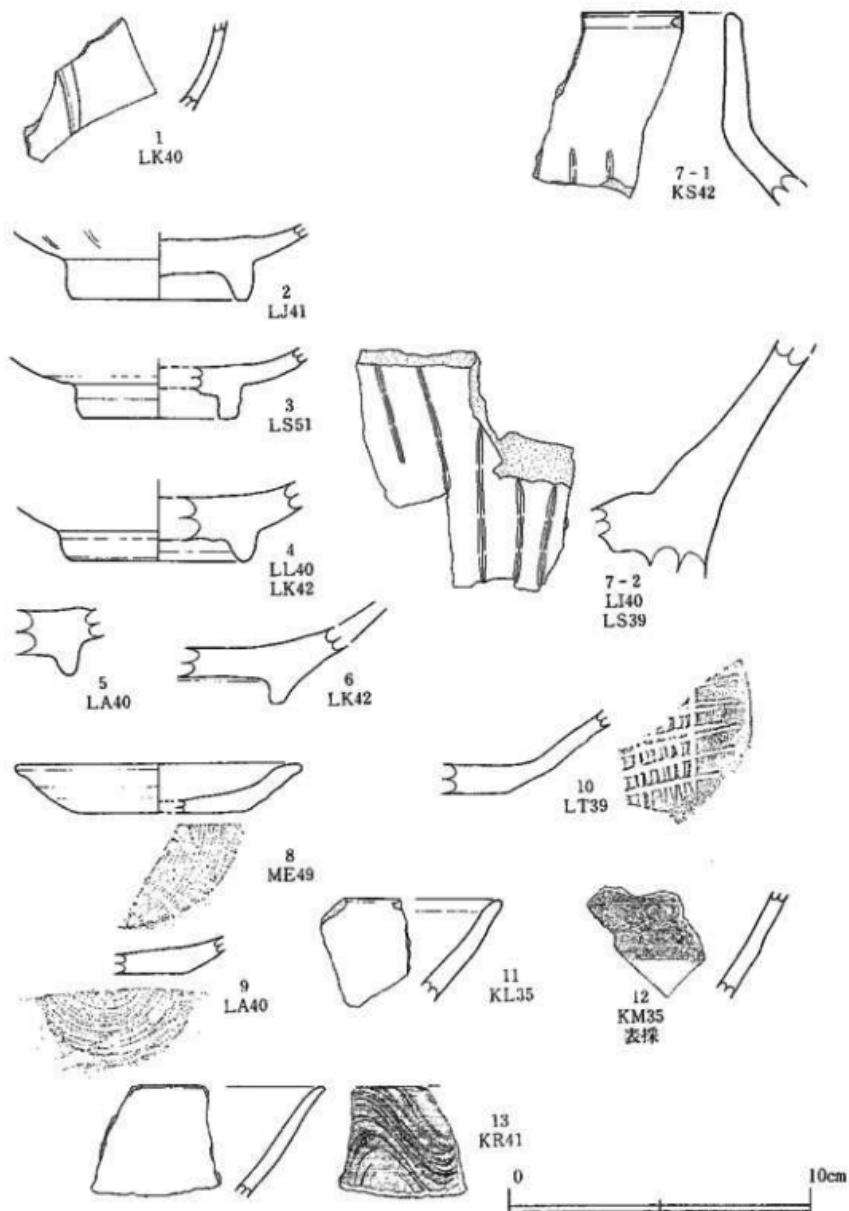
第35図 中世の陶器(1)



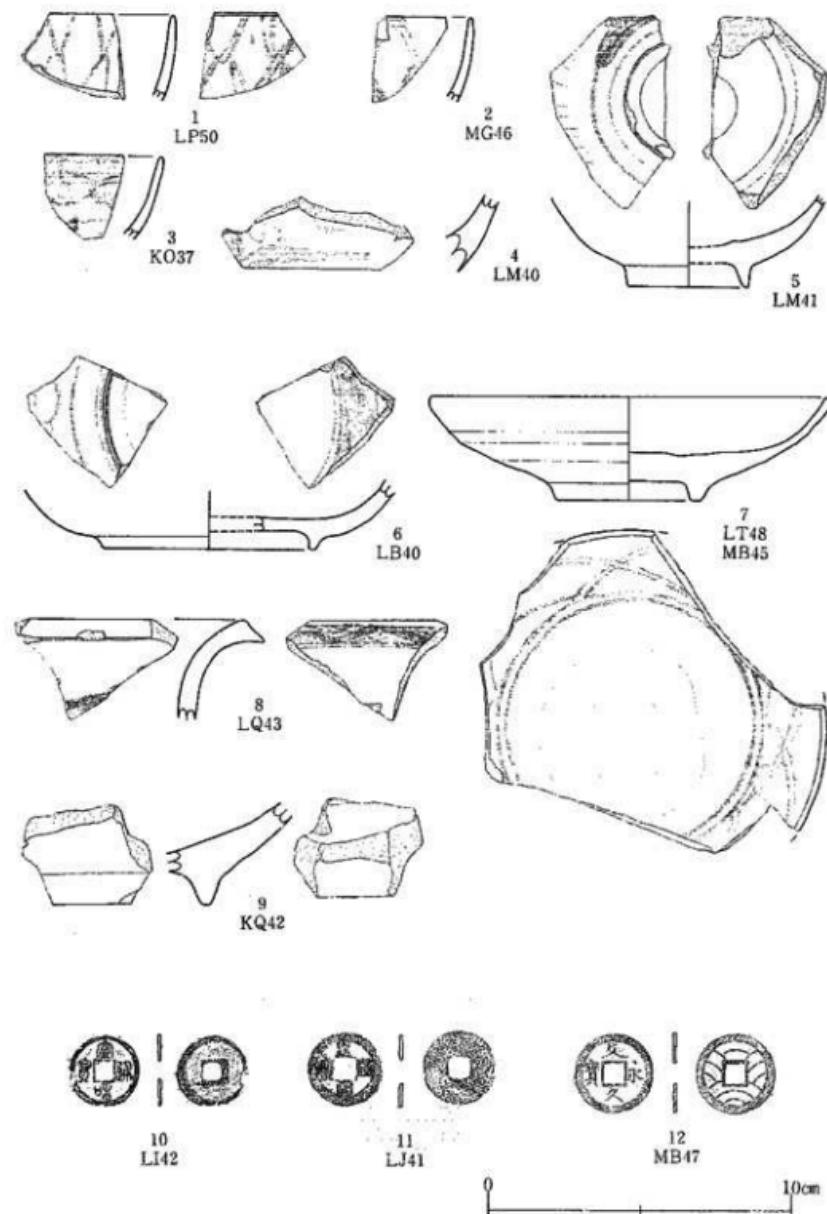
第32図 中世の陶器(2)

第33圖 中世の陶器(3)





第34図 中近世の陶磁器



第35図 近世の磁器・中近世の銭貨

## 第5章 まとめ

### 第1節 縄文時代後続期の土器群について

第4章第1節(1)に記した土器群は、壺形土器における刷毛目工具の連続圧痕などの特徴から、いわゆる「遠賀川系土器」を含む土器群である。近年、秋田県内のこの種の土器群を出土する遺跡については、日本海沿岸経路を重視した上での東北弥生時代社会最古集落とまで言われるようになっている。

確かに、東北地方北部地域にあって本遺跡の位置する八郎潟沿岸部は、初痕土器を検出した井川町新聞遺跡や、男鹿市三十刈I遺跡、炭化米を出土した若美町横長根A遺跡を擁し、早くに初期稻作の伝わった地域である。本遺跡の西約1kmに位置する家の上遺跡でも粉痕土器が確認されている。しかしながら、このような稻作痕跡の一面のみでこの地域を含む東北北部縄文時代終末期後の社会を評価し、その文化内容を律することは、前代からの伝統のもと、より北方の地域との関係も併せて培われる該地域先史社会の多様性を覆ってしまうことになりかねない。特に重要なのはそうした評価がある閉鎖空間を仮想することで可能となることである。そもそも、「遠賀川系土器」の名そのものが初期稻作の代名詞のようなもので、開放系であるべき先史文化を年代的・空間的に規定する土器型式ではありえない。

本書ではその意味で当該期の遺物群を「縄文時代後続期」という扱いで記述した。

出土した遺物は第4章冒頭に記したように、すべて館の上館第I郭上面からの転落遺物と考えられる。平成5年度の調査で、館の上館第IV郭およびその南西側の台地上面で十坑墓58基、壺棺22基からなる墓域が確認されており、第I郭上にも古代・中世以前にこの時期の居住空間が営まれていたものと考えられる。

遺物群の各論的評価は平成5年度調査分の報告で改めておこなわなければならないが、とりあえずここでは縄文時代直後の土器について、周辺諸遺跡出土資料との関係でその位置づけを簡単に記しておきたい。

出土した土器には大洞A'式にあたるものも含まれている。浅鉢形土器の第6図1~5、鉢形土器の第8図23がそれである。本遺跡の北8kmに位置する寒川I遺跡では、幾分細目の沈線によって多段化した変形工字文を描く浅鉢および鉢形土器が出土している。大洞A'式よりもわずかに新しいこの寒川I遺跡の土器には、第11図63~65、67~71にあるような口縁部の短い壺形土器が伴っている。この種の壺形土器では刷毛目調整が施されることはほとんどなく、寒川I遺跡の場合にはごく少数横位の刷毛目調整が施されるだけである。寒川I遺跡の壺形土器では口縁下の肩曲部に沈線を巡らす例の割合が、本遺跡に比べ総体として低いという違いがあ

るが、この種の土器が刷毛目が多用される以前の大洞A'式に近い関係をもつものといえるであろう。

本遺跡では第10図52～59のような、口縁部に縦位の刷毛目痕を残す變形土器が認められる。類似の土器は横長根A遺跡や、男鹿市大倉遺跡<sup>(出典)</sup>に多く、第6図8～12、第7図13～18のような細く鋭い描線による變形工字文、平行沈線文を施す浅鉢形土器や、第9図42～47のような広口壺との中間的な形態の變形土器を伴っている。寒川I遺跡出土土器群よりは新しくおかれる土器である。第13図99～第16図100に示した広口壺はその半数が内外面のいずれか、あるいは両面に刷毛目調整の痕跡を残す。秋田県内の事例では横長根A遺跡第1号住居址出土資料や、秋田市地蔵田B遺跡<sup>(出典)</sup>、湯ノ沢A遺跡第1号堅穴状遺構および土器棺資料<sup>(出典)</sup>が著名である。地蔵田B遺跡、湯ノ沢A遺跡出土資料には独立した鋸歯状ないしX字状区画の磨消繩文を施す例も含まれ、時期幅がやや広い。本遺跡出土の広口壺には1点の磨消繩文を施した資料（第14図115）が含まれるが、同じ文様は横長根A遺跡第1号住居址出土壺の体上半にもとられ、地蔵田B遺跡、湯ノ沢A遺跡の独立区画の磨消繩文よりも古手におかれる。大半の無文あるいは平行沈線のみの壺形土器も刷毛目多用の点から、総体として第10図52～59のような變形土器に伴うものと考えられる。寒川I遺跡出土土器群に後続し、横長根A遺跡や、地蔵田B遺跡、湯ノ沢A遺跡の古い部分の一部と併行する時期の資料としてとらえたい。

## 第2節 中世の遺構について

本遺跡帶郭上面に確認された6条の溝跡は、館の上館第Ⅰ郭の造成・改築に伴って作り替えがなされたものと判断され、その延長は第Ⅰ郭と第Ⅱ郭の間を区切る空堀へと続くと推定された。中世城館の周囲を巡る段築が、調査の結果、狭い掘あるいは溝と地山削出しの土壁とで構成されている例が知られており、本遺跡の溝跡も基本的に同様の構造をもつ。特徴的なのはSD13、SD14のような斜面へ向かう屈曲部をもつことで、これなどは溝跡が単に第Ⅰ郭の周囲を区画するだけではなく、戦時側防のための折<sup>(注)</sup>邪<sup>(注)</sup>のような施設であったことも考えさせる。

また、帶郭西肩部分に確認されたSK01は地下式坑と判断された。県内の中世城館での類似の遺構は確認されていないが、千葉県四街道市池ノ尻城址<sup>(出典)</sup>では類似の遺構が12基確認され、報告者の大橋康二氏によって「地下式土倉」の呼び名と、貯藏・蓄財の機能が考えられている。本遺跡の事例は出土遺物もなく、その正確な時期・機能とも不明である。県内および隣県での類例が増えることに期待したい。

※ (註)は図版頁末尾に記載



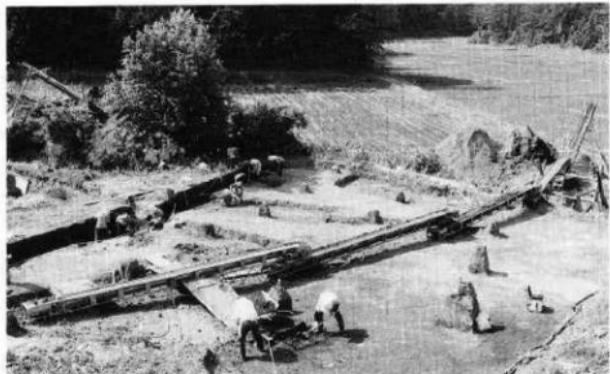
1 調査前遺跡全景  
(東→西)



2 調査後遺跡全景  
(東→西)



3 東側斜面での  
調査状況



1 西側斜面下での  
調査状況



2 東側斜面下  
完掘状態（西→東）



3 西側斜面下  
完掘状態（東→西）



1 帯郭上面溝跡  
SD10, SD11  
土層断面（西→東）



2 带郭上面溝跡  
SD10～SD15  
重複状態（西→東）



3 带郭上面溝跡  
SD10～SD15  
完掘状態（西→東）



赤部上面走路  
SD10~SD15  
完壁状態（北→南）



1 東側斜面  
土層堆積状態  
(分析試料採取箇所)



2 帯郭西側肩部  
SK01完掘状態  
(東→西)



3 帯郭西側肩部  
SK01完掘状態  
(南→北)

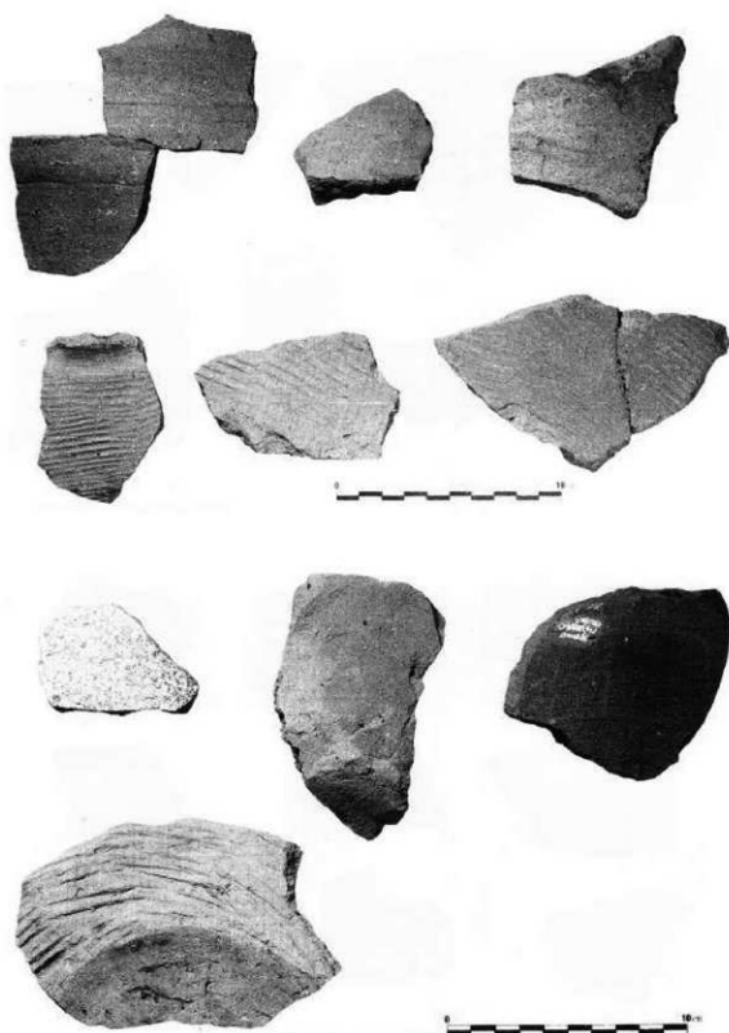


1 2 3



1 2 3

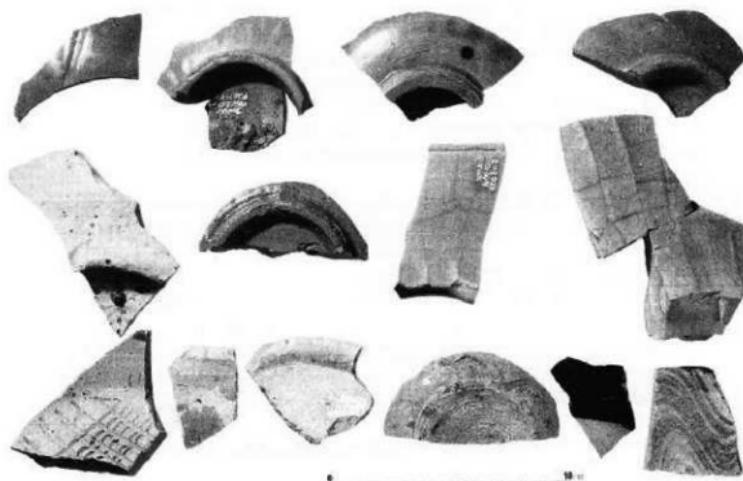
古代の土器



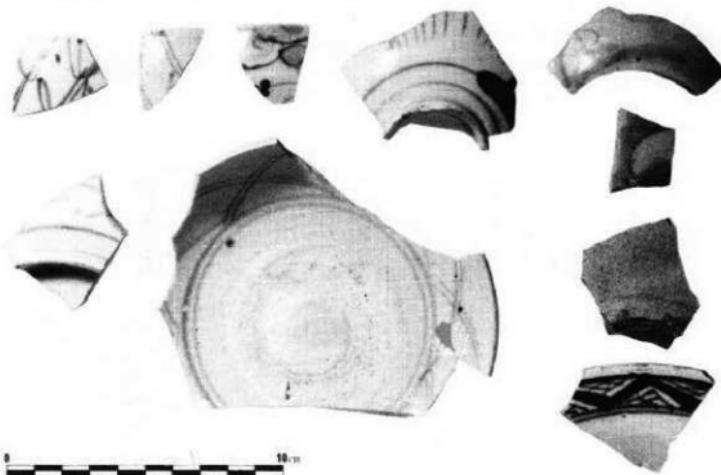
中世の土器(1)



中世の土器(2)



中世の陶磁器



近世の磁器

- (註3)13の断面が摩られており、破片を砥石に転用したと思われる。須恵器にもみられることから、転用の時期を近世以降に想定したい。
- (註4)『珠洲の名陶』珠洲市立珠洲焼資料館(1989)の編年表を参考にした。
- (註5)手あぶりの年代については、八戸市根城出土資料を参考にした。
- 『根城一本丸の発掘調査』八戸市教育委員会(1993)
- (註6)製作年代については、愛知県陶磁資料館井上喜久夫氏のご教示による。
- (註7)産地及び製作年代については、愛知県陶磁資料館井上喜久夫氏のご教示による。
- (註8)(註7)に同じ。
- (註9)須藤隆「弥生社会の成立と展開」『新版 古代の日本 9 東北・北海道』1992(平成4年)
- (註10)小武海松四郎『切妻土器とともにう秋田県南秋田郡井川町新間遺跡遺物について』1977(昭和52年)
- (註11)秋田県教育委員会『三十刈I・II 遺跡発掘調査報告書』1984(昭和59年)
- (註12)若美町教育委員会『横長根A遺跡』1984(昭和59年)
- (註13)児玉準「家の上遺跡調査報告」『秋田県埋蔵文化財センター年報』3 1985(昭和60年)
- (註14)山内清男「日本遠古の文化」『ドルメン』1-4~9, 2-2 1932(昭和7年)
- (註15)秋田県教育委員会『一般国道7号八竜能代道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書I』1988(昭和63年)
- (註16)児玉準「男鹿市大倉遺跡出土の弥生時代遺物について」『研究紀要』第2号 秋田県埋蔵文化財センター 1987(昭和62年)
- (註17)秋田市教育委員会『福ノ沢A遺跡』『秋田臨空港新都市開発関係埋蔵文化財発掘調査報告書』1984(昭和59年)
- (註18)秋田市教育委員会『地藏田B遺跡』『秋田臨空港新都市開発関係埋蔵文化財発掘調査報告書』1986(昭和61年)
- (註19)秋田県教育委員会『西山地区農免農道整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書II -高瀬跡跡-』1987(昭和62年)
- (註20)小室栄一『中世城郭の研究』1975(昭和50年) 新人物往来社
- (註21)中野遺跡調査団『下絶国四街道地域の遺跡調査報告書-池ノ尻館址・戸崎館址・前広遺跡-』1986(昭和61年)